

草戸千軒町遺跡1970年度
発掘調査概報

1971年

広島県教育委員会

序 文

中世の大集落跡として有名な草戸千軒町遺跡が約180,000㎡にわたって埋藏されていることは、すでに周知されているところである。

この芦田川については、建設省が昭和43年度から年次計画にもとずいて改修工事を実施している。

昭和43年度には、芦田川高水敷護岸の災害復旧工事を行なうことになったが、その工事区域には遺跡包蔵地3,000㎡が含まれていたため、県教育委員会は工事着手前に発掘調査を行なった。この調査結果は、すでに「草戸千軒町遺跡1968年度発掘調査概報」として発刊した。

その後、改修工事の進展に伴い、昭和44年度には、約62,000㎡の遺跡包蔵中洲の保存問題に当面するにいたった。

とくに上・下流の河床の掘削整備に伴って、約3,000㎡の遺跡包蔵中洲が低水敷に孤立し、流失の危険にさらされることになったので、県教育委員会は、これの発掘調査を行なった。この調査結果も、すでに「草戸千軒町遺跡1969年度発掘調査概報」として発刊している。

昭和45年度は、前年度調査地域よりも下流にある約3,000㎡の遺跡包蔵中洲が低水敷に孤立し、流失が危惧されたので、発掘調査を行なうこととし、着手したが、調査途中、台風第9号、第10号により調査区が流失したので、急遽、予定を変更し、低水敷中の井戸や流水に接する遺物包含層などで、新たな出水によって流失する危険のある地域の調査をおこなった。

この発掘調査は、文化庁の補助金を受けた県教育委員会の直営調査であり、広島大学教授、県文化財専門委員松崎寿和氏を団長とする15名の調査員がこれにあたり、昭和45年7月20日から10月31日までの間、実施した。

調査にあたっては、建設省福山工事事務所の協力によって流水を堰き止めて行なったが、なにぶん低水敷のため、台風や大潮による冠水にあい、土砂崩れなどになやまされるなど困難をきわめた。しかし、調査員各位の努力によって無事所期の目

的を達成することができた。

ここに、調査の概要をまとめて報告書を刊行するにあたり、適切な指導を賜った文化庁、困難な諸条件を克服して調査を全うされた調査員各位、物心両面にわたって積極的に協力いただいた福山市教育委員会に対し、深い感謝と敬意とをささげるものである。

昭和46年3月

広島県教育委員会教育長

宮 地 貫 一

草戸千軒町遺跡1970年度発掘調査概報

目 次

I 調査の経過	(1)
a 協議の経過と1970年度調査の概要	(1)
b 調査区の設定	(4)
c 調査区における遺構・遺物出土の概況	(6)
II 遺 構	(9)
a O0区第1号井戸	(9)
b O1区第1号井戸	(11)
c O2区第1号井戸	(12)
d O3区第1号井戸	(14)
e O4区第1号井戸	(17)
f A0区第1号井戸	(19)
g C1区第4号井戸	(22)
h C1区第5号井戸	(24)
i C1区第6号井戸	(24)
j C6区第1号円形井戸	(25)
k C11区第1号井戸	(27)
l D2区第4号井戸	(28)
m D2区第5号井戸	(30)
n 杭列とD3区第1号井戸	(32)
III 出土遺物	(35)
a 陶磁器・土器類	(35)
b 石製品・土製品	(40)
c 板碑・木製品類	(41)
d 鉄製品・銅製品	(44)
e 古 銭	(46)
IV 総 括	(49)
付 発掘調査日誌抄	(54)

図 版 目 次

- 図版 1 a 草戸千軒町遺跡遠景 b 調査区近景
- 図版 2 a 調査区断面 b 流失した調査区
- 図版 3 a O3区第1号井戸全景 b 隅柱と横棧の状態
- 図版 4 a O4区第1号井戸全景 b 横棧の組方
- 図版 5 a A0区第1号井戸調査前の状態 b 上部構造内部の状態
- 図版 6 a A0区第1号井戸上部構造内部の状態 b 下部構造上端の状態
- 図版 7 a D2区第4号井戸全景 b たがのしめ方の状態
- 図版 8 a D3区発掘前の状態 b 杭列全景
- 図版 9 a 杭列とD3区第1号井戸との関係 b 杭列部分
- 図版10 a D3区第1号井戸上部の状態 b 井戸全景
- 図版11 a 中国製陶磁器類 b 日本製陶磁器類
- 図版12 a 土師質土器 b 石製品・土製品
- 図版13 a O0区第1号井戸くりぬき中筒 b 木製椀

図 表 目 次

- 第1表 草戸千軒町遺跡出土古銭種類一覧表……………(47)

挿 図 目 次

第1図	草戸千軒町遺跡調査区配置図	(5)
第2図	Gトレンチ南壁断面図	(6)
第3図	O0区第1号井戸復元図	(9)
第4図	O3区第1号井戸添板拓影	(16)
第5図	O4区第1号井戸復元図	(17)
第6図	A0区第1号井戸実測図	(20)
第7図	A0区第1号井戸機軸の組方	(21)
第8図	C11区第1号井戸機軸の組方	(28)
第9図	D2区第4号井戸復元図	(29)
第10図	D2区第5号井戸機軸の組方	(31)
第11図	D3区平面図 (No. 1は第1号井戸)	(32)
第12図	中国製陶磁器類実測図	(35)
第13図	備前焼・瀬戸焼類実測図	(36)
第14図	常滑焼・亀山焼実測図	(37)
第15図	土師質土器実測図	(39)
第16図	石製品・土製品実測図	(41)
第17図	板碑実測図	(42)
第18図	木製品・骨製品実測図	(43)
第19図	鉄製品・銅製品実測図	(44)
第20図	古銭拓影	(46)
第21図	発掘調査スナップ (No. 1~No. 11)	(54~64)

凡 例

- I 本概報は、芦田川の東側低水敷中に孤立し流失のおそれのある小中洲約3,000㎡の緊急発掘調査の報告である。
- II 発掘調査は、広島県文化財専門委員、広島大学文学部教授松崎寿和氏が調査団長となり、国、県の経費をもって広島県教育委員会が実施した。
なお、福山市教育委員会ならびに建設省中国地方建設局福山工事事務所の援助によるところが多かった。
- III 本概報は、伊吹尚、金井亀喜、河瀬正利、脇坂光彦、中田昭、山県元が分担執筆し、河瀬が編集した。
- IV 出土遺物の整理・実測は、上記のもののほか、是光吉基、鹿見啓太郎があたり、奈良井晶子、川崎真木子が援助した。

I 調査の経過

■ 協議の経過と1970年度調査の概要

本年度は、7月20日梅雨あけ宣言と同時に調査に入ることにした。本遺跡の緊急調査も通算6回目を数え、県教育委員会がおこなう調査は、昭和43年以来、本年度で3回目にあたる。しかし、文化財保護行政側の努力にもかかわらず、河川改修工事によって、本遺跡が近い将来当面するであろう諸問題の解決は、何一つとして進展を見せていない。

昭和42年6月、芦田川が一級河川に昇格し、それにとまう芦田川改修計画が発表され、草戸千軒町遺跡を含めた中洲の掘削があきらかにされて以来、県教育委員会は、文化庁および地元福山市教育委員会と緊密な連絡をとりながら、建設省に遺跡包蔵中洲の保存を要望してきた。

昭和44年6月26日、文化庁の指導のもとに、公文書によって、つぎのような内容の照会を、建設省中国地方建設局長あてに行なった。

①河川改修工事に関する建設省の基本方針は何か、②遺跡包蔵大中洲掘削の全体計画とは、どのような内容のものか、これにたいして、建設省は、7月に入り、つぎのような意味の回答をよせてきた。

建設省としては、河川下流域に居住する人々の生命の安全を確保するために、数十年に一度の洪水にも対処できるように、河川敷を整備したい。そのため、芦田川の下流に点在する中洲は、洪水にたいして非常に危険であり、一級河川としての基準にもあわない。それ故、河川としての正常な機能を維持するためにも、中洲を掘削するのはやむを得ない。というようなものであった。しかしこの回答では、保護側が要望している遺跡の保存が、どの程度可能なのか、あるいは、全く不可能なのか判然としないため、10月に入り、さらに、つぎの3点について、建設省の専門的見解を求めた。

① 流量、堤防の強度などから、遺跡包蔵中洲62,000㎡は、どうしても除去しなければ、ならないのか、

② 遺跡包蔵中洲を、現状のまま保存した場合、実際に、どのような問題がおこるのか、

③ ②の場合には、どのような措置が必要となるのか、

これに対し建設省中国地方建設局からは11月上旬、つぎのような回答があった。

① 現行の計画高水流量は毎秒1,950 m^3 （神島橋地点）で、確率年（註 堤防が決壊するほどの洪水が起る年）は約20分の1と、他の都市河川に比較して極端に低い。福山市の将来の発展を考慮するならば、確率年が100分の1の高水流に対処できるようにせねばならず、計画高水流量は、毎秒2,800 m^3 にまで引き上げる必要がある。したがって、遺跡包蔵中洲は撤去する必要がある。

② 中洲を現状保存した場合、河川管理および維持の上から非常に好ましくない、また、それに必要な川幅を確保せねばならず、引堤が必要となってくる。引堤の場合、100戸以上の家屋移転が必要となり、このための用地確保や、主要幹線である国道橋（神島橋）、国鉄山陽本線橋梁等の崩壊しや、幾多の取付道路の用地買収などが伴い、概算でみても約50億円以上の巨費が必要となる。

③ 洪水による侵蝕、流失に対処して、中洲のまわりを強固な護岸などで防護するとともに、その線形は流水方向にたいして、スムーズなものとする必要がある。このためには、高さを低くすることが必要となり、包蔵中洲の一部を取り除くなどの処置が必要となってくる。しかし、このような防護施設を施行しても、河川敷であるため、将来にたいする永久保存にはならないのであろう、というものであった。

この回答にもとづき、11月18日には、文化庁記念物課の横山浩一文化財主任調査官を迎え、県教育委員会から、西本省三文化財係長と河瀬正利文化財保護主事、それに福山市教育委員会関係者が、建設省福山工事事務所に赴き、協議を行なった。ここでは、建設省から、県教育委員会への回答の資料になった流量計算書や引堤に要する概算額の内訳書や計画図をもとに、かなり詳細な説明があった。そこでこれらの資料や設計図の入手を求めたところ、建設省もこれらの送付を約束した。ところがその後公文書でこれらの資料送付を求めたところ、前置をひるがえし資料送付を拒否してきた。このため県教育委員会は再三にわたり電話により資料送付を依頼した趣旨を説明したが、理解をえることはできなかった。

11月26日、山陽新幹線建設予定ルートを視察のため来福した、文化庁記念物課の平野邦雄文化財主任調査官と県教育委員会の西本係長、および福山市教育長は、再び建設省福山工事事務所を訪れ、資料の提出を求めたが、再度拒否された。

その後は、文化庁の指示を受けながら遺跡包蔵中洲の全面発掘調査に備えて、調査体制の確立と、費用の原因者負担要望のための、調査費の積算内訳を検討し、これを建設省中国地方建設局に示して、意向を打診している。

ところで、このような遺跡の人為的消滅とは別に、本遺跡の自然流失も、休む間もなく進ん

でいる。県教育委員会は、これらの自然流失に対しても、事前に記録作成の処置を講ずるため、国庫補助金150万円、県費負担金150万円の総額300万円で毎年発掘調査をおこなっている。

今回は遺跡包蔵大中洲南端附近で、東岸高水敷と大中洲南附近で、東岸高水敷と大中洲にはさまれた東側低水敷中にあり、流失の危険のある小中洲約3,000㎡の発掘調査を行なった。

梅雨あけの喪天と河川の増水は、発掘作業の進捗を著しくさまたげたが、8月初旬、建設省福山工事事務所の協力によって、ブルドーザーによる流水堰止をおこない、排土作業も急ピッチで進められるようになった。中旬にいたり、遺構相当面の露出を終え、いよいよ遺構検出をおこなうこととしたやさき、8月14日夜半に米襲した台風9号と、8月21日に広島県を直撃した台風10号は、半か月以上を費して築いた堤防と、露出した遺物包含層を完璧なまきまでに押し流してしまった。河川は附近のコンクリート橋（潜流橋）を押し流し、高水敷内にある交通公園のアスファルトや仮設物をも流し去った。これらをもみても流水の猛烈さがいかなるものであったか理解されよう。水位の低下を待って、早速現地で、団長以下調査員全員による対策協議会を開いた。その結果つぎの点を中心にして、調査を続行することとし、文化庁の了解を求めた。

① 今回の調査区はほとんど流失したが、もし流失をまぬがれた部分があれば、これを調査する。

② 新たな出水によって、流失の懸念される低水敷中の井戸、および大中洲北端の小中洲をはじめ、大中洲東北端部分および中央部東側で、流水敷に接する杭列遺構などを調査する。

まず①から順次おこない、結局、低水敷中の井戸14か所、杭列遺構等を調査し、本年度の発掘作業を終了した。

なお、本年度の発掘調査団は、つぎのとおりである。

調査団

(団 長)	松 崎 寿 和	広島県文化財専門委員 広島大学文学部教授
(副団長)	村 上 正 名	広島県文化財専門委員 広島大学教育学部付属福山高校教官
	瀬 見 浩	広島県文化財専門委員 広島大学文学部助教授
	藤 田 等	静岡大学人文学部助教授
	川 越 智 志	広島大学文学部助手
	福 井 万 千	広島大学文学部教務補佐員
	西 本 省 三	広島県教育委員会専門員兼文化財係長
	河 瀬 正 利	広島県教育委員会文化財保護主事

金井 亀喜	広島県教育委員会指導主事
伊吹 尚	〃 〃
是光 吉基	〃 〃
山泉 元	〃 〃
脇坂 光彦	〃 〃
鹿見 啓太郎	〃 〃
中田 昭	〃 〃

このほか、服部宜昭（上下高校教諭）、安田龍太郎（広島大学大学院生）、菅井良夫（同学生）、佐藤達夫（同研究生）、石口律恵（国学院大学学生）などの方々の協力をえた。ここに厚くお礼申しあげる。

（河瀬 正利・金井 亀喜）

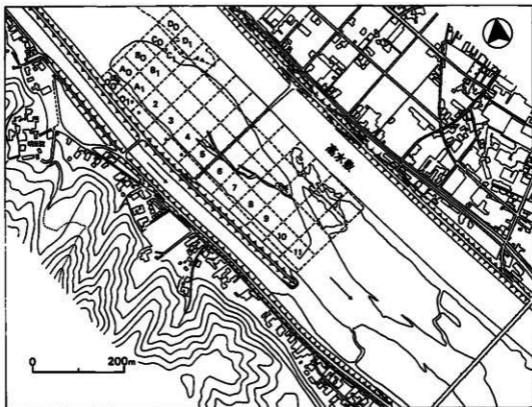
b 調査区の設定（図版1、第1図）

昨年度の調査以来使用することになったグリッドは、遺跡包蔵大中洲の中央にかかる潜流橋東端を原点とし、潜流橋を横軸に、これに直交する南北軸を縦軸として、50m四方のグリッドを設定して、西から東に原点にむかってA・B・C・Dと呼称し、南北軸は北から数字の0・1・2……9・10・11であらわすことにしている。さらに、50m四方のグリッドを10m四方のグリッドに細分して西から東にa・b・c……w・x・yとしたのであった。本年度からは、この呼称の仕方を踏襲するので、最初の調査区であった大中洲南端附近に孤立する小中洲は、D8・D9・D10・D11・C9・C10・C11区に入ることになる。しかし8月14日夜と8月21日の第9号、第10号台風による被害で、この中洲での調査が事実上無意味になったため、調査地域を変更せざるを得なくなり、その後の対策を協議した結果、低水数中で流失の危険のある十数か所の井戸、および低水数に接して日々崩壊し、消失していく中洲の中の杭列などを中心に調査することとなった。

まず、遺跡包蔵大中洲北東端附近の小中洲と、それに隣接する低水数中の井戸2か所、および、これらの井戸よりも南にある同じ西側低水数中の井戸4か所を、調査することとした。測量の結果、これらの井戸の大部分は、昨年度の調査で設定したグリッドの西側にあり、中に入らないことが判明したので、A区の西側に、新たにO区を設定した。これにより小中洲は中央部で東西に分かれA0区とO0区に入り、小中洲に隣接する2つの井戸の内、東側中央部に接する井戸はA0区第1号井戸、中洲の南側9mに位置する井戸はO0区第1号井戸と呼ぶことにした。さらにこの南側にある4基の井戸は、それぞれ西側堤防に近接し、O1区からO4区

のグリッドに、1か所ずつ発見したので、それぞれO1区第1号井戸、O2区第1号井戸、O3区第1号井戸、O4区第1号井戸と呼んだ。なお、それぞれの井戸間の距離は北からA0区第1号井戸とO0区1号井戸が10m、O0区第1号井戸とO1区第1号井戸間は38m、O1区第1号井戸とO2区第1号井戸間は27m、O2区第1号井戸とO3区第1号井戸間は79m、O3区第11区1号井戸とO4区第1号井戸間は44mある。

大中洲の東北端C0区では、流水路に接する部分の土砂の崩壊が激しく、かなり侵蝕されつ



第1図 草戸千軒町遺跡調査区配置図

つあるので、えぐりこまれた地点を中心にして、水路ぞいに細長い三角形のトレンチを設定し、これを調査した。この地域はC0区g・hグリッドに相当するものである。

C2区からD3区かけては、北側にある昨年度調査区が消滅したため、本流が直接このあたりを洗うようになり、土砂の流失が進んでいる。C2区はすでに調査済（1965年度調査）なので、このすぐ南の流水路ぞいに枕列が顔を出し、一部は水没し流失しつつあるので、この地域

を中心に、南北に35m、東西に7mのトレンチを設定し調査した。グリッド名は、D3区a・b・k・Pである。

東側低水敷に孤立する井戸は、結局8か所を調査した。1つは最南端にあり、当初の調査地域内の西側低水敷にあるもので、C11区第1号井戸と呼ぶ。1つは潜流橋東端のベンチマークより55m西の橋脚に近接する低水敷中の円形井戸で、C0区第1号井戸である。さらにD3区の枕列に近接してD3区fグリッドに、D3区第1号井戸がある。これらの3か所の井戸はそれぞれかなり離れた位置にあるが、残りの5箇所の井戸は、近接して存在する。このうち、D2区第4号井戸、D2区第5号井戸、C1区第4号井戸、C1区第5号井戸は、昨年度調査の小中洲のあったところ、もしくはそれに非常に近接した低水敷中にあり、昨年の調査段階ではあきらかにしえなかったが、洪水により粘土層が大幅にえぐられた結果遺構相当面より下からあらわれたものである。

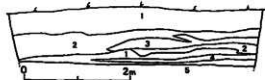
C1区第6号井戸は、C1区のほとんど北端に近く、大半は流水中にあるものであった。

(金井 亀高)

C 調査区における遺構・遺物出土の概況 (図版2、第2図)

今回は発掘調査途中の洪水により調査中洲が流失したので、当初の予定を変更して、最も流失の懸念される地域や、すでに半ば流失したり、流失しつつある地域、および、低水敷中の井戸を中心に発掘調査をおこなった。このため、調査区が62,000㎡の遺跡全域に点々とし、まとまった遺構としてとらえることのできる地域はなかった。

当初の調査中洲は5つの小中洲からなり、いずれの中洲も、流水による土砂の二次的堆積が目立った。D9区のGトレンチ南壁によると、遺構相当面の上に、暗褐色砂質土や青色粘土が、細い帯状に不整合に、85cmから115cm堆積しており、その中には時おり陶磁片も見られたが、いずれも生活層としてとらえることはできなかった。遺構相当面である褐色粘土層は、表面が流水によってあらわれた時期もあったようで、流水による条痕が走り鉄分が赤褐色に沈着したところもあった。また表面には陶磁片等が散見された。昨年、一昨年調査



第2図 Gトレンチ南壁断面図 1. 灰白色砂層
2. 暗褐色粘質土層 3. 黄白色粗粒砂層
4. 青色粘土層 5. 褐色粘土層

の遺構相当面のレベルからみて、室町期の面はすでに流失し鎌倉期に比定される遺構面のみが

残っていると思われた。その他大小合わせて7か所トレンチを設定し、最終的には、中洲の全面的な排水をおこなったが、いずれのグリッドの堆積も同様であった。

C 0区トレンチでは、西壁の断面で見ると、1 m以上の砂の堆積があり、これを除くとトレンチのほぼ中央部、Vグリッドで幅2.0 m、深さ10~20 cmの浅い溝が走っているのが発見された。溝の中は砂粒を含む青色粘土がつまっており、遺物は少なく、青磁(竜泉窯)断片や土師質小皿が発見されるだけであった。今回の調査では設定したトレンチの制約もあって、溝の長さは4 mにとどまり、この溝がさらに西に向ってどのようなのびていくかは今後の調査に待たねばならない。またこの溝の東南端から6 mの低水敷中に水没して、C 1区第6号井戸があり、溝の走る方向から考え合せて、何等かの関連があったかもしれない。

D 3区北側では杭4、5本が水中に見え、水辺の表土もかなりはがれてトレンチの東半分は粘土層がえぐられていた。トレンチの南側に表土のえぐられた水たまりがあり、これをポンプによって排水したところ、表土下約1 mのところに13本の杭が南北に整然と並んでいるのが発見され、北側の杭列とつながることが判明した。また、杭列中央部よりやや北側で、杭列の東側に近接して掘り方が発見され、井戸であることがあきらかになった。この杭列は掘り方が非常にせまく、しかもかなり密にたてられており、昭和40年度調査のG区杭列との関連が考えられるがその関係はあきらかではない。なお、この杭列はさらに南に続くようである。杭列と井戸との時代的先後関係については、杭の掘り方上端の方が井戸の掘り方の位置より幾分高いけれども、井戸の掘り方は水流などによりえぐられているので、その関係は判然としない。トレンチの西側では、遺構相当面がかなり高い位置に残っているが上層が室町期で下層が鎌倉期の包含層であるという証左は得られなかった。これは調査トレンチを限定して設定したためであり今後の調査に待たねばならないが、鎌倉期の遺構相当面よりかなり高い。

つぎに、低水敷中にある井戸についてみればいずれも水没したものが多く、調査は困難をきわめた。

東側低水敷では、最南端にC11区第1号井戸がある。木組み方形プランの井戸であるが、井筒を構成する外板が中継しており、下部の井筒の中に上部の井筒をはめ込んだ形をしている。

C 6区第1号井戸およびD 2区第4号井戸は円形プランの井戸であるが、その構造は本遺跡では初見のものである。50~60本の幅のせまいたて長の板をならべて、上下2段に長方形のホゾ穴をあけて、両端の尖った竹のクサビで連結し、その外側を竹のタガでしめた円筒形となすもので、すくなくとも2段以上に重ねたようである。中から木製鎌、刀子、土師質土器などが出土した。

C1区第4号、5号、6号井戸は、いずれも木組み方形井戸であるが、材の腐蝕がはなはだしく、下部を残すのみであった。C1区第6号井戸は、曲物を底にすえていた。C1区第5号井戸からは土師質小皿、備前焼すり鉢、亀山焼、白磁などの陶磁器片が出土した。

D2区第5号井戸も木組み方形井戸である、東西、南北とも約2mの掘り方が残っていた。北側の外板は東半分が幅4～5cmのほそい板を8本使用し、そえ板をめくらしていた。底面には円礫をしきつめている。遺物は青磁片が多く出土した。

西側低水敷中に点在する6基の井戸も木組み方形のプランをしているが、A0区第1号井戸とO0区第2号井戸は、内側にもう一本円形の井筒をもつ複数の井筒になっている。O0区第1号井戸は一木をくり抜いた中筒をもつもので、本遺跡の調査では3個目である。A0区第1号井戸の中筒は、幅5cm余りのたてながのほそい板を円形にならべ、ホゾ穴をあけてクサビでつないだものである。この井戸は下部構造が非常に丈夫に作られており、しっかりと残っていた。すなわち、厚さが5cm余りの厚い板を12枚、ほぼ円形にならべて、両端を削り、大きなクサビで上下を連絡して12面体を構成しその上に、他の井戸などでよくみられる方形井筒をのせている。上部方形井筒は、内法が一まわり小さいので、12面体の下部構造の端に板を横にのせ、その上に井筒を置いて、安定をはかっている。遺物は、備前焼の甕、すり鉢片、青磁、土師質土器片、古銭、木片など比較的多かった。

残りの4基の井戸のうち、O2区第1井戸とO3区第1号井戸は、四隅に柱を配し、柱にホゾ穴を穿って横棧をわたした形のもので、昭和37年の調査で発見されたものと同じ構造である。(1965年西側方形1号井戸 福山市教育委員会「草戸千軒町遺跡・遺跡編」)。なお、O3区第1号井戸の底には、曲物のかわりに、オケ状の円筒が置かれていた。遺物は、備前焼、常滑焼、亀山焼の口縁部が目立ち刀子、影青の断片も出土した。

O4区第1号井戸は、今回調査の井戸の中でA0区第1号井戸とともに、もっともしっかりしたものであった。3段の横棧が残り、底には曲物も残っていた。井戸の内部にはかなり礫が多く、調査に手まどったが、遺物も豊富で、備前焼、常滑焼、瀬戸焼、青磁などの陶磁器片、土師質のナベ・小皿類、スラグ塊、フィゴの火口、古銭、土鍾、木製品(ひとがた)などがあつた。これ等の井戸については遺構のところで、それぞれ詳述した。

西側のこれらの井戸は、測量図の上で見ると、ほぼ一筋にならぶようであり、この付近に水脈が走っていることをおもわせる。東側の低水敷中のC1区、D2区附近では、昨年度調査の井戸の分布とともに考え合せるとき、多少の時代的な先後関係はあるにせよ、かなりの人家が存在していたといえよう。

(金井 亀喜)

Ⅱ 遺 構

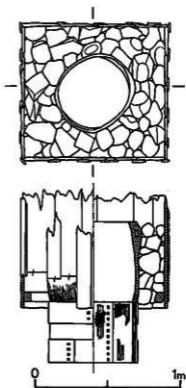
a O O区第1号井戸 (図版13a、第3図)

遺跡包蔵大中洲の北西端付近で、右岸堤防から約15mの流水路中に孤立する小中洲があるが、この中洲の9m南に存在する。北東に25mでO O区第1号井戸、南に50mでO 1区第1号井戸がある。

本井戸は、内法が東西96cm、南北80cmの方形の外板の内側に、内法長径52cm、短径46cmの楕円形プランの、一木くり抜きの中筒を設けているが、平常はほとんど水没しており、干潮時にわずかに、井筒外板の上端が水面上にあらわれていた。したがって、上部構造はすでに流失し、現状の井筒板上端から下端湧水層までは約1.1mをはかるのみであった。その上、流水中の川底に口を開いているため、土砂の流入が多かった。

遺物の量はあまり多くなく、くり抜きの中筒の中から、古銭1枚(祥符通宝)、土師質土器(小皿、ナベ)、陶磁器(竜泉窯青磁、備前焼のすり鉢・壺片、亀山焼片)、瓦質土器、それに井戸の一部に使用されたとおもわれる木材断片が出土したのみであった。

構造についてみると、まず、井筒を構成する外板は、厚さ1.5~2cmのたて板を、東西南北に、それぞれ、5・5・6・5枚と配し、内側に横棧をはめて固定している。板と板との間隙、および節穴などは、厚さ0.5~1cm、幅6~13cm、長さ60~70cmの添木をあてて汚水の流入をふさいでいる。外板や添え木は木材をたてに割ったような剝離のあとがみえるものがあり、外板の外側の面にこれをそのまま使用したものがある。また板材の両面に手斧調整痕のあるものもある。添え木は、このように、たて割りにしたものをそのまま使用したものが大部分をしめるが、なかには、別の目的のために使用されていたものを、あらためて添え木として利用した、いわば廃物利用と思われるような、



第3図 O O区第1号井戸復元図

二次的な使用痕や、人工的な孔などのある板材も発見された。なお、板材の下端は、凹凸があり、断面の匠痕の具合からみて手斧で切断したものと思われる。

横棧は、外板の下端より、約4cmのところにあったがそれぞれ大きさは一様でなく、幅4～7cmで、北側と南側の棧の両端には凹形のホゾ穴を穿ち、東側と西側の棧の両端は凸形にホゾを造り出して、それぞれをかみ合せた、いわゆる、カネ形3枚ホゾによる突き付けの仕口をとっている。

ホゾ穴は、横棧にする材の両端をノコで切り落とし、その断面の中央部にノミでえぐりを入れたもので、大きさは、幅2～3cm、奥行5～6.5cmである。ホゾは、同じく材の両端をノコで切断し、端から2.3～4cmのところに上下から1～2cmの深さの切れ目を入れ、木口からたてにきり取っている。このホゾとホゾ穴は、ぴったりとかみ合うことはなく、かなり間隙があり、作り方にしても、一定の規範のもとに作らず、ノコ目の入れすぎや、ホゾの先端がなまめになっているものもあった。特に北東隅のカミ合せでは、北側のホゾ穴をあけすぎたため、東の棧がホゾ以上に棧の部分まで入り込んでいた。また、これらの外板や棧を固定するための釘の使用は認められなかった。

棧自体は、木材を荒く、たて割りしたもので、柾目がよく通っている。北側の棧の上面と下面、南側の棧の上面、西側の棧の外板に接する部分とその反対側の面では手斧による調整痕がみられた。また、南側の棧の下面には、幅0.8cm、高さ0.2cmの摩耗した造り出しが、まっすぐについており、北側の棧と西側の棧にも、これと類似の摩耗した造り出しが斜めに走っている。したがって、井戸材としては、二次的な使用であったかもしれない。

本井戸においては、上部構造が全く失われ、横棧は一段しか発見されなかったが、井筒である外板を安定させる意味においては、さらにいくつかの横棧があったことは、十分考えられる。

中筒であるくりものは、井戸内部のほぼ中央に、長軸を北東から南西にむけ、短軸は北西から南東にむけて据えられており、高さ54cmで、ちょうど横棧の下端と同一のレベルに達して、この下に置かれた曲物に接していた。くりものと外板との間には、直径10～20cm大の円礫や角礫が、くりもの上端のあたりから、下端までびっしりとつめこまれていた。おそらく、これらの礫で、この楕円形工作物の安定をはかったのであろう。

このくりものは、厚さ2～3cm、胴部がわずかにほらみ、内法で、下端径が上端を約4cmうまわっており、やや下ぶくれ気味である。また、東側と西側に、たて長の孔のある把手をつくっている。把手は左右均斉でなく、東側がやや大きくて、幅5.5cm、長さ24cm、厚さ4cmを

はかり、西側は幅5cm、長さ24cm、厚さ3cmをはかる。孔は、くりもの上端より、それぞれ6cmのところあり、東側が1.7×3.5cm、西側が2×3.7cmであった。くりもの自体は、ほぼ完全な形であったが、下端の欠損したところは、たて24cm、よこ4cmの欠損した形に合せた小さな板でもってさしこみ、6か所を角クギで打ちとめていた。また、このくりぬきの上端から約1cmのところには、5か所に、外面から内面にむかって、たて、よこ0.5cm、長さ2～3cmの角クギが打ちこまれていた。これらの把手や上端附近の釘が、井戸本来の目的のために使用されたのか、あるいは、井戸以外の目的で使用されたものであるのか、また、このくりものが上部構造とどのように関係するのかなどはあきらかでない。

曲物は、湧水層である砂層中に、くりものに接して置かれている。大きさは、内法径53cm、高さ42cmでほぼ円筒形をしており、5枚のうす板を重ね合せ、厚さは約3.5cmをはかる。うす板の外側は、幅16cmの板2枚で、上端と下端をしめ、タガのような機能をはたしている。うす板は、それぞれ、端をうすく削って重ね合せ、幅1.5～2cmの一重の板皮で縦列に串縫いのようなどじ方でとめてあり、上端の一部には、釘穴が残っている。

本遺跡の調査で、井戸の中筒にくりものを使用した板井筒の例は、今回で3個目である。(1965年西側方形井戸3号、福山市教育委員会「草戸千軒町遺跡・遺跡編」・1969年C1区木組み第2号井戸、広島県教育委員会「1969年度調査概報」)。しかし、前2者の場合は、湧水層中に、設置され、曲物と同様の機能を果たしたとおもわれるが、本井戸の場合はくりものおかれた位置が、湧水層を離れ、外板下端よりも上にある。(金井 亀高)

b O1区第1号井戸

芦田川西岸ぞいの流水路にあり、A0区第2号井戸の南約83mに位置している。干満をとわず水没していたため、井戸内の土砂の堆積が著しかった。井戸の保存状態はあまりよくなく、井筒のほとんどの縦板は約40～60cm残存しているにすぎないが、東西101cm、南北106cmの内法をもつ正方形に近い平面をなしている。縦板は東3、西3、南4、北2の計12枚が残存していたが、各板の正確な位置は確認できなかった。また、横棧は一段だけ残っていた。

東の3枚の縦板の幅は、25.5～29cmであり、厚さは、それぞれ1.5～2.5cmである。縦板と横棧は釘打ちされているが、横棧の上面から縦板の下端までの長さは、38～42cmである。北側から3枚目の縦板には、下端から41cmと37.5cmの板の両縁部2箇所に鉄釘が外側から内側へ打たれたものが残存し内側部分に約10cmのびている。これは、ちょうど構架の位置にあた

る。

西の3枚の縦板の幅は、30~31.5cmであり、厚さはそれぞれ1.5~2.0cmである。

南の4枚の縦板の幅は、13~32cmで、横棧上面から下端までの長さは、30~41cmであり、厚さはそれぞれ1.5~3.0cmである。最も西側の縦板には、底から29.5cmと28.5cmの板の両縁部2か所に釘が打たれている。

北の2枚の縦板は、西側から幅27cm、31cm横棧上面から下端までの長さは37.5cm、42cmであり、厚さはそれぞれ1.5~2.0cmである。

横棧は1段だけ4面とも残存しており、東と西の棧のそれぞれ両端がほぞ穴で、南と北の棧のそれぞれ両端がほぞとなって組み合わさっている。東の横棧は長さ106.2cm、幅5.7cm、厚さ8cm、西は長さ105.7cm、幅4.7cm、厚さ7.6cm、南は長さ101cm、幅5.8cm、厚さ6.7cm、北は長さ101cm、幅5.8cm、厚さ6.6cmである。その横棧の縦板側にそれぞれ2~3箇所、釘の一部が残っている。

横棧の四隅での組み方は、東と西が、それぞれ両端の井戸内側部分で、端から約5.5cmの位置を深さ約1.5cm切り込み、この深さの面で端の部分を取りのぞいている。さらにこの切り取った面の中央部に棧をとりつけるときと同じ方向で、幅2.0~2.5cm、長さ約2.5cmの凹状の溝をつくってほぞ穴としている。南と北のほぞの部分は、横棧の井戸内側部分を端から3~3.5cmの位置で、深さ0.5~1.0cm切り込み、この深さの面で端を取りのぞいている。さらに端から約2cmの部分の棧の上面と下面から切り込み、中央部の1.5~1.8cmを残して他は切り落している。そして奥行約2cmの凹部をつくってほぞとしている。

この組み方は、本年度調査したC11区第1号井戸の上段横棧と同じものである(第8図)。また、横棧は一段しか残っておらず、当初は何段あったか不明であるが、この横棧は最下段のものである。

井戸の中は、上から砂、砂まじりの粘土、砂となっており、井戸の中からの出土遺物としては、竜泉窯青磁、菊文の印目のある瓦質土器、備前焼、常滑焼、亀山焼、土師質土器、元祐通宝1、寛永通宝2が発見された。(脇坂 光彦)

C O2区第1号井戸

この井戸は、O1区第1号井戸の南約33mのところであり、西の護岸からおよそ10mのところ、西側の護岸から張り出している砂洲の直ぐそばに、やや砂におおわれた状態にあった。

井戸は干潮時に若干水面からのぞき、四隅に柱を打ち込みその柱に横棧を上下二段に挿入し、横棧に寄りかからせるようにして縦板が置かれている、一辺約1m強の方形の木組み井戸である。縦板のうち北側のものは、ほとんど流失しており、横棧も、上段のものはほとんどなくなっていた、縦板は土砂に押されて四方とも内側に大きく彎曲していた。

隅柱は南西隅柱以外はすべて円柱で、上部は流水中にあるため、土砂に洗われたらしく細く磨り切れていた。また底部は腐蝕を防ぐために焼かれており、すべて炭化している。

北西隅柱は、径約10cm（見長）で東側に多少彎曲している。底部は底から7.5cmと8cmのところより切り込んで、先を尖らせている。

北東隅柱は、径約11cm、長さ116cmで、中空になっており底から24cmのところから先端に向かってカットしている。

南西隅柱は、他の3本の柱と異なり不整の六角形をなし、東西、南北とも約10cm、長さ108cmで、底は、水平に切断されている。

南東隅柱は、径約10cm、長さ120.5cmをはかり、底から7cm、11.5cm、7cmの計3か所の切り込みがみられ先を尖らせている。

横棧は、ほとんど残存しておらずその構造はあきらかでないが、柱に穿たれた穴によって、上下二段に配されていたらしい。上段、下段とも西側と東側の横棧の方が、北側と南側のそれよりも、一段低い位置に組まれていたものと思われる。

上段の横棧は北側のみ一部残存してただけであり、下段の方も西側で2片、東側で6片の小片がみられ完全に残存していたのは南側のみであった。しかもいずれも土圧により内側に彎曲していた。下段の南側の横棧は二つに折れ彎曲しているが、全長114.5cm、木口は縦3.3cm、横1.5cmで、両端から約3cmのところまで柱に挿入されていた痕跡がみられる。

横棧の大きさは、それぞれの柱に穿たれている穴から推定してみると、横棧は、上段、下段とも大差のない大きさであり、縦が4.0~7.0cm、横が2.5~6.0cmの大きさで、柱に3.0~4.5cm差し込まれていたものと思われるが、柱に差し込む時、多少削っており（下段の南側の横棧には、その痕跡が窺える）この寸法より大きかったものとおもわれる。またホゾ穴は、奥がスゴまった形をしていた。

柱に穿たれているホゾ穴には、未使用のものがあり、北東隅柱に、縦9.0cm、横4.0cmの穴（北側に位置し、穴の上端は柱の下端から6.5cmのところ）1か所、南西隅柱に、縦2.5cm、横2.5cm、深さ0.5cm、3.0cm×3.5cm×3.0cm（いずれも西側の面に位置する、柱下部より82.5cmと56.0cmのところ）、7.0cm×3.0cm×1.5cm（西側の横棧が挿入されるホゾ穴と同じ面に位置し、

柱尻より55.5cmのところ)の3か所がみられ、計測違いの失敗作と思われる。南西隅柱のホゾ穴は、東側のものは南側の横棧に直角に面を合わせて開けられ、北側のものは、一面置いて次の面、つまり、東側の面から三番目の面に斜めに開けられている。

ホゾ穴の上段の上端は、柱尻よりいずれも58.0cmをはかり、また一本の柱における上段の上部のホゾ穴と、上段の下部のホゾ穴のそれぞれの上端は、ほぼ10cm離れている。下段の、西側と東側の横棧が挿入されていたホゾ穴の上端から柱の底までの長さは、北東隅柱14cm、北西隅柱24.5cm、南東隅柱27.5cm、南西隅柱27.0cmをはかり、横棧のそれぞれが水平に置かれていたとすると、上部構造は明らかでないが、ほぼ水平に製作されたものと考えられるから、柱は同じ深さに打ちこまれたものでなく柱の長さが異なるものを使用したものであろうか。

縦板は西側で8枚、南側で5枚、東側で5枚であるが、北側は残りが悉く西端に1枚残存していただけである。幅は3.0~27.5cmで一定しておらず、厚さは0.5~3.0cmである。長さは、先端が摩り切れているので実長ではないが、最も長いもので117cmをはかる。

東側の縦板で北東隅柱から1番目のものは、底から26cmのところと91cmのところに、4cm×4cmと3.5cm×2cmの穴があいていたが、それを被うようにして添木が置かれていた。縦板の底部はほぼ水平に切られているがでこぼこである。また西側の縦板で南西隅柱から1枚目のものは、底から16cmのところより内側が底に向かって削られ、薄くされているところからすると、縦板は上から打ち込まれたものようである。

また縦板の中には腐蝕を防ぐためか下の方を黒く焼いているところがみられる。

添木は西側では、南西隅柱から1番目と、外板の5番目と6番目との間に、また、東側では北東隅柱から1番目と、縦板の2番目と3番目、4番目と5番目の間にあった。添木は、幅、厚さ、長さとも、縦板と大差ないものが使用されている。

縦板にもそえ木にも釘や釘穴が全くみられず、残存している横棧にも釘で打ちつけられた痕がみられないところからみて、砂層中に縦板やそえ木を打ち込み横棧に寄りかからせる構造の井戸であったようである。

出土遺物は、内部の砂や青色粘土、約10~20cmの河原石の中に土師質土器片、亀山焼片、刀の茎、烏帽子を冠ったひとがた、木の実等が出土した。

(中田 昭)

d O3区第1号井戸(図版3、第4図)

この井戸は、芦田川西護岸より東へ約10mの位置で、芦田川西流の中にあり、O2区第1号

井戸より南へ約80m、O4区第1号井戸より北へ約40mのところにあった。干潮時にはその上端部をのぞかせるが、ふだんは水面下にあった。井戸の周囲や内部には角礫や円礫が多く、それを取り除くと、直径が約1.4mのほぼ円形の掘り方をもつ木組みの方形井戸があらわれた。外法の1辺は約1mの方形で四方に隅柱があり、横棧は3段で、底には17枚の板からなる桶状の筒があった。

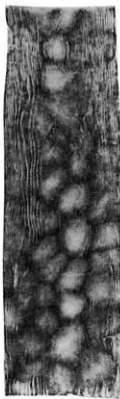
縦板（外板）は、現存長120～130cm、幅30cm前後、厚さ2～3cmの板が、北側、東側、西側にそれぞれ3枚づつあり、南側は2枚しか残っていなかった。いずれも上端部はすり切れていたが、底部は大体板目に直角に切られほぼ水平になっていた。なかには、北側の中央と、西側の南端の板のように、底部が丸く、下から約10cmの板の真中に径2～3cmの穴があけられているものもあった。横棧の位置には釘痕は見られないが、その下側はいずれも板が0.5cmあまりの深さで削りとられている。縦板の両面はほぼ平らに削ってあるが、東側の北端と、南側、東側、西側南端の各1枚は上から下へ荒く断ち割るようにして削ってある。

隅柱は4本あり、現存長は90～150cm、太さは一辺11cm前後の方形であるが、上部は約1cmほど細くなる。いずれの柱も、二面に3個づつ、横棧を差し込むほぞ穴がけられている。ほぞ穴は、縦10～12cm、横5～7cm、深さ2～3.5cm程度の大きさで、奥すばまりになっている。左右のほぞ穴は、ほぼ同位置で、同じ大きさであり、柱の中心部で2つの穴がくっつきそうになっている。底部は、周囲が6角ないしは8角に削られており、ほとんど角柱に近いものになっている。底はほぼ平坦である。

つぎに横棧は、1段目の下面が縦板の下端から120cmのところであり、2段目が75cm、3段目は30cmのところにある。1段目の横棧は、全長100cm、幅4～6cm、厚さ8cm前後の大きさで、その両端は凸形で、隅柱に差し込むようになっている。横棧の先端から2.5cmで井戸の内側から1～2cmのところを切り落している。横棧はかなりいたんでおり、隅柱より保存状態は悪い。2段目の横棧は、全長101cm、幅6.5cm、厚さ9cm前後で、しっかりした太い棧である。両端部は、1段目と同じ凸形で、棧の先端から3～3.5cm、井戸の内側から2.5cmのところを切り落して隅柱にはめ込んでいる。棧の上面と下面はきれいに平らに削っているが、側面は荒削りで、でこぼこがある。また、釘痕も見られない。北側と東側の横棧の下面は、内側が面取りしており、断面が五角形を呈している。3段目の横棧は、全長101cm、幅6cm前後、厚さ9cmで、北側と東側の棧の断面が三角形を呈するようなものを使用している。また、いずれの側の両端も凸形で、切り取り方は、上2段と同じである。

井戸の底のほぼ中央部に、直径60cmあまりの曲物の代用と思われる桶が置かれていた。ほぼ長方形のやや内罅する17枚の板でつくられたもので、桶の上端部は、3段目の横棧上面と同じ高さである。桶の周囲には竹を編んだ幅4cmのたがが1つはまっている。桶の縦板は、全長48～53cm、幅12cm、厚さ1.5cm前後の大きさと、幅は上部が下部より2cmあまり狭くなっている。竹のたがは、縦板の上端から15cmぐらいのところにはまっていたが、腐蝕がひどく、ぼろぼろになって縦板にくっついているものもあった。縦板は上下両端とも水平に切つてあるが、両面が削つてあるため、両端部の厚さは少し薄くなり、0.5cm前後になっている。縦板の下端部はほぼ完全に残っているが、上部は欠けているものもある。水汲のためであろうか。

外板のそえ木は、東側に7枚、西側に7枚、南側に10枚、北側に9枚の計33枚ある。大きさは、現存長60～100cm、幅10～27cm、厚さ1～2.5cm前後のものが多い。南側と北側の添木のほとんどは、手斧で荒く削られているため、長さ6～7cm、幅10cm以上の鱗状の凹凸ができています。西側のそえ木にその痕がよく残っている（第4図）。それは、板の下側から上に向つて斜めに、板の縦の面から40°から50°の角度で削つてある。1つ1つの鱗形の削り痕の中に、削り



第4図 O3区第1号井戸
添板拓影

方向と同じ方向に、細い擦痕がついており、手斧の歯こぼれの跡と推定される。

井戸の内部は、礫や粘質土がつまっております。底には、桶状の筒を安定させるために、周囲に15～20cm大の角礫や円礫をつめ、固定していた。桶状の筒の下は、湧水層である青色砂層となつていた。

出土遺物は豊富で、鎌倉期の備前焼口縁部と、同時期の常滑焼の口縁が10片あまり出土したのをはじめ、^{シロテ}鎮の強く出た竜泉窯青磁片など中国製青磁、土師質土器、亀山焼、土鍋の口縁部などがあり、鎌倉期に比定されるものが多かった。（山泉 元）

● O4区第1号井戸（図版4、第5図）

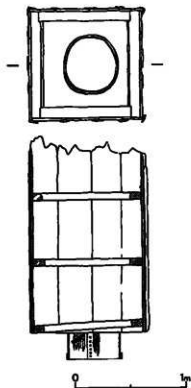
O3区井戸の南約45mの芦田川西岸ぞいの流水路にあり、満潮時には完全に水没するが、干潮時には井筒の縦板の一部が露出している状態であった。井戸は内法、東西97～98cm、南北88～90cmの矩形の平面をなしており、東西南北ともそれぞれ4枚の計16枚の縦板で四方を囲っているが、残存する縦板の長さは160～170cmである。また上、中、下3段の横棧をもち、井戸の底には曲物が存在していた。

東の4枚の縦板の幅は、北側から順に28cm、30.5cm、29.5cm、12cmであり、板の厚さはそれぞれ1.5～2.0cmである。西の4枚の縦板の幅は、北側から29cm、28.5cm、29.5cm、12cmであり、厚さはそれぞれ1.5～2.3cmである。南の4枚の縦板の幅は、西側から順に29.5cm、20.5cm、30.5cm、13cmであり、厚さはそれぞれ1.5～2.5cmである。北の4枚の縦板の幅は、西側から順に、22cm、30.5cm、24.2cm、26.7cmであり、厚さはそれぞれ1.5～2.0cmである。これらの縦板には、横棧の位置に縦板と横棧を釘打ちした釘や釘痕がある。釘は縦板に横棧の位置で、縦板の両縁付近に上、中、下段とも2本ずつ計6本打ったのがほとんどであるが、なかには両縁に打たず片方だけのものもある。また東の最も南側の縦板や、西の最も南側の縦板のように、幅の狭い板では、上、中、下段とも1本だけ打っているものもある。

南の東端の縦板には、約1.5cm四方の穴が6箇所、縦列にくりぬかれている。これらの穴は板の底から、19cm、43cm、67.5cm、92cm、115cm、138cmのところ、板の東縁からそれぞれ2.0～2.5cmの位置である。これが井戸と直接の関係があったものかどうかはあきらかでない。

縦板の外側には数枚の添木が残っているが、これは、井戸の四隅付近や縦板と縦板の継ぎ目部分にみられた。

横棧は、上段、中段、下段の3段となっており、東では横棧の上段上面と中段上面間は60cm、中段上面と下段上面の間は59～60cmであり、上段上面から縦板の底



第5図 O4区第1号井戸復元図

までの長さは125cm～126cmとなっている。西側、南側、北側ともこれとほぼ同じ状態である。

3段ある横棧の東と西の棧は、長さ97～98cm、幅が9.0～10.0cm、厚さ5.0～7.0cm前後のものを使っており南側と北側では、長さ87～91cm、幅9.0～11.0cm、厚さ5～6cm前後のものを使っている。

横棧の四隅での組み方は、上段では、東と西の棧の両端がそれぞれ凹状となり、南と北の棧のそれぞれ両端が凸状となって、南と北の棧が東と西の棧にさしこまれている。下段の組み方も上段と同じであるが、中段はこの関係が逆になっている。つまり、東と西の棧のそれぞれ両端が凸部となり、南と北の棧のそれぞれ両端が凹部となって、東と西の棧が南と北の棧にさしこまれている。

ほぞ部分の構造は、棧の端から4.5～6.0cmのところを上面と下面から切り込み、中央部約1.5cmを残し、他は切り落して凸部をつくっている。また、棧の端から約9cmの井戸内側部分を深さ約1.5cmまで切り込み、その深さの面で端までとりのぞき、さらに、この取りのぞいた面のほぼ中央部に、棧を取りつけるのと同じ方向に幅1.5～2.0cm、深さ約6cmの溝を掘って、長さ約9cmの凹部をつくっている。この組み方は、いわゆるかね形三枚ほぞの仕口で、昨年調査したD2区第3号井戸の横棧と同じものである。

井戸の底のほぼ中央部には直径約50cm、高さ約25cm、厚さ0.2～0.3cmの曲物がおかれている。曲物の上端の高さは縦板の底とほぼ同じ高さである。曲物は一重であり、両端をつなぎあわせてあるが、幅約0.5cmの板皮でとじている。曲物をとじるため重ねあわせ部分は約11cmである。板皮は外側の曲物の端から約2cmと、内側の曲物の端から約9cmとを結んで縦列に7箇所あり、それぞれ幅0.5cm、表面に出ている部分の長さ1～2cmで0.5～1.0cm間隔となっている。曲物の内面には、板を曲げやすくするため縦方向と斜方向に、幅0.5～1.5cm間隔で切れ目が入れてあり、また部分的に両方向の切れ目が重なりあっている。

この曲物の底の外側には、さらに高さ5.5cm、厚さ0.5cmの曲物のたががまわしてあり、曲物を固定している。たがの重なりあっている部分の長さは、内側のたがの端が欠損しているので不明である。外側のたがの端から1.5cmのところには3箇所、7.5cmのところには2箇所、それぞれ縦列に板皮のとめがあり、重なりあった板をとじてある。前者の3箇所の板皮は、幅0.5cm、表面に出ている部分のそれぞれの長さ0.5～0.8cm間隔となっている。後者の2箇所の板皮は、幅0.5cm、表面に出ている部分の長さ0.4～0.5cmでたがの下半部にあり、上下の板皮の間は0.7cmである。たがの内面には重なりあう部分の一部に、斜方向の切れ目が入れている。

井戸は常時水に洗われているので、縦板の上端から50cm余りの深さまで砂と礫が堆積してい

る。この中から、土師質の小皿や土鍋、備前焼片が出土している。この下の層は、ワラ、小枝類が多量に含まれる青色粘土となっており、多くの出土遺物が認められた。古銭では、祥符通宝1、寛永通宝2の3枚、木製品では、内側が朱、外側が黒塗りの漆碗、下駄のような平面をもった薄手の加工木片、櫛片、陶磁器類では、備前焼すり鉢、亀山焼、土師質土器、竜泉窯青磁、石製品では、石臼、砥石があり、その他表面に樹木らしき模様を刻んだ、竹製のこうがいと思われるものがあつた。また、ふいごの火口とスラグが多量出土し、鹿角、猪の下あご、魚のうろこ、松かさ、栗の突、どんぐりも出土している。この層の下は、固い青色砂層から井戸底の砂へと続いている。ここからは、烏帽子のついたひとがたが出土している。小形で寛げずりだが烏帽子は鋭く長い、また瀬戸焼の天目茶碗、曲物の木片、土師皿の完形品が出土している。この青色砂層から底の砂にかけては多くの礫がみられ、さらに曲物のまわりに多量の礫をつめこみ浮上を防いでいる。

(脇坂 光彦)

f A0区第1号井戸(図版5・6、第6・7図)

この井戸は遺跡包蔵中洲の北西端の低水敷のなかにあつて、満潮時には水没してしまうが、干潮時には方形プランのたて板が露出しており、方形プランの木組み井戸であると予想されたが、調査の結果、3種類の工作物を組み合わせた複雑な構造をもつ井戸であることが判明した。

井戸内部には、相当量の砂をまじえる青灰色粘土がつまっており、井戸わくの先端より2.2mで湧水砂層に到達する。青灰色粘土層からは、皇宋通宝1枚、竜泉窯青磁片、備前焼の甕、すり鉢、亀山焼の甕の破片とともに、土師質の小皿の破片が多量に出土し、これらが本遺跡において、広く一般的に使用された日常什器の一つであつたことを物語っている。出土した備前焼の甕、すり鉢はいずれも、口縁部に室町期の特徴をしめすものであつた。

これらの土器、陶磁器のほかには、多量の板材、木片が出土した。このなかには、この井戸に使用されていたのではないかと考えられるものも含まれている。

また、魚の骨、鱗、赤ニシの殻なども出土し、当時の人々の食生活の一端をうかがうことができる。

この井戸の掘り方の中の砂まじり粘土層からは、土師質小皿、備前焼の甕などと、口唇部に褐色釉のかかった中国製の磁器片などが出土した。これら掘り方から出土した遺物から考えて、この井戸の構築の上限を室町期とすることができよう。

井戸の構造についてみると、上段に方形の井戸わくが、その下段には十二面体をなす井戸わくがあり、さらに上段の方形の井戸わくの上側の内わくの上には、狭長の板材50枚を縦に並べ

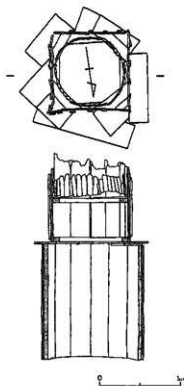
て作った円形の工作物がすえてあった。

上段の方形のわくは内法で1辺が約95cmをはかり、厚さ約2cm、幅20cm前後の板を南・北・西側はそれぞれ5枚使っているが、東側は南東のコーナーより北へ3枚は、幅20cm前後の板を、それよりも北側は7cm前後の板を4枚使っている。そして、たて板の外側には、継目にそれぞれ7cm程の添え板をあてて、土砂と汚水の流入を防いでいる。

この内側には、幅8cm、厚さ5cmの角材を組み、内わくとし、上下二段、それぞれ鉄釘でたて板に固定し、たて板にかかる土圧をささえている。この井戸は低水敷にあったためか、たて板は相当沈下したり、浮上ったりしていた。しかもその度合にも差がみられ、内わくは当初の位置からずれていたが、たて板についている内わくの痕跡から判断すると、下段の内わくはたて板の下端に、上段のわくは下わくの上端から44cm上に固定されていたようである。

わくの組み方は、上下段ともに南と北の材の両端にはほぞを、東と西の材の両端にはほぞ穴をつくり、東と西の材を南と北の材にさしこんでいる。南・北材のほぞはたて板の側から5cm、上下はそれぞれ1.7cmほどを切り欠いて、幅3cm、厚さ1.5cmのほぞをつくり出しているが、単なる平ほぞではなくて、たて板の側にむかって平面が三角形をなすひかえがあるので、大根の部分を三角形に変えたいわゆる小根ほぞといわれるものである。そして、小根の部分には2箇所、ほぞの根もとまで切りこんで、くさび道がつくられている。東・西材は両端より5cm内寄りの部分にそれぞれ、長さ3cm、幅1.5cmのほぞ穴を明け、南・北材のあたる部分を1.5cmほど切り欠いて、組み合わせがより強固になるようにしている。さらに、ほぞ穴は井戸の内側になる部分よりも、たて板の側の長さがやや大きいあり形で、南・北材をこれにさしこんだのち、長さ4.5cm、幅1～1.5cmのくさびを2箇所打ちこんで、さしこんだほぞがぬけないようにしている。

上段の内わくの四隅には、厚さ1.5cm前後の板を三角形に切ったものをはめこんで、この上に円形工作物が置いてあった。これは桶の底をはずしたような構造で、直径は内法で約82cmで



第6図 A0区第1号井戸実測図

ある。厚さ3～4cm、幅5～6cmのやや内反する50枚の板材を竹製のくさびでつないでついている。くさびは長さ約4cm、厚さ2～3mmで、両端を尖らせている。くさびの幅は中央部で約1cmをはかるがこれを板材の木端につくられたほぞ穴にさしこんで、板材を連結している。板材の木



第7図 A0区第1号井戸横棧の組方

端にあげられたほぞ穴の位置は、板材の下端よりだいたい13～15cmのところであり、最も高いものの位置は下端より18cm、最も低いもので下端より11cmである。また、井戸内部より出土した板材のなかの幅5～6cm、長さ50～65cmの狭長なものには、木端にこの円形工作物の板材の木端にみられたほぞ穴があり、円形工作物の上部が折れて、内部に落ちこんだものと考えられる。

なお、この円形工作物には当初はたががはめられていたものと考えられるが、詳らかにしづらい。

方形の井戸わくおよび円形工作物は、ともに上部が腐蝕していて、全長を明らかにすることはできないが、たて板は現長1m前後、最長1.1m、円形工作物は現高25～28cm、最長30cm、最短は11.5cmをはかり、たて板と円形工作物の上端の差は現在では約15cmほど円形工作物が下にある。円形工作物は前述した井戸内部より出土した板材とあわせて考えると、本来、70～80cmの高さをもっているものと考えられるが、たて板の上端と円形工作物の上端のどちらがより高い位置にあったのかはあきらかにしづらい。

これらの上部の構造物をとりぞくと十二面体の構造物がある。これは、長さ1.4m、幅25cm、厚さ5cmの板を接いで、十二面体としたもので、個々の板材は、丸太を縦割りにし、内面はかんな様の刃物でていねいに整形している。外面は部分的に手斧様の刃物で調整され刃物の刃幅は板材に残っている痕跡からみると7cm以上のものと思われる。この板材の木端に長さ5cm、幅1cmのほぞ穴を明け、ここに長さ4.5cm、幅5cm、厚さ1cmの木製のくさびをさしこんで、板を相互に連結しており、それらとはりはずしが困難なほど密着していた。ほぞ穴は、板の上端より40cm下寄りのところと、下部より30cm上のところ、2箇所にあけてある。

この構造物の外側には、長さ1.3～1.5m、幅10～15cm、厚さ1～2cmの板が数多くそえてあり、やはり井戸内に汚水や土砂が流入するのを防止する役目をはたしたものである。このなかには、下端を円形に加工して、粘土層に容易に打ちこめるようにしたものがいくつかある。

十二面体の構造物と上部の方形のわくの間には、長さ60cm前後、最も長いもので120cm、幅

約30cm、厚さ1cmの板を1～2枚置いて、わくが安定するよう配慮がなされていた。この板のなかには、中央部を三角形に切り欠いたものが4枚あり、三角形の頂点が方形のわくの隅とほぼ一致するように置かれていた。(伊吹 尚)

Ⅷ C1区第4号井戸

芦田川は遺跡包蔵地である本中洲によって東西に分流しているが、この井戸は東側の流水路にあり、明王院の前面約330mの位置にある。干満をとわず常に水没していた。

井戸は内法74～75cmのほぼ正方形の平面をなしており、井筒の縦板は、東6、西5、南4、北3の計18枚と、北に3枚のそえ木とで四方を囲っている。また内側には上下二段の横棧が現存している。縦板の長さそれぞれ約110cm残存しており、当時の位置を動いていないものと思われる。東の6枚の縦板の幅は、北側から順に15.5cm、23cm、8cm、12cm、12.5cm、6cmであり、厚さはそれぞれ1.4～2.0cmである。また下段横棧の上面から縦板の底までの長さは、北側から順に20cm、20.5cm、20cm、20.5cm、20cm、19.5cmである。縦板にはちょうど横棧の位置に外側から釘または釘を打ちつけた穴が残っており、東側で最も北よりの縦板の両縁には釘が、上段横棧部分で2箇所、下段横棧部分で2箇所の計4箇所にみられる。北側から2枚目の縦板には、上段横棧部分で板の南縁に1箇所、下段横棧部分では両縁に2箇所の計3箇所、3枚目の縦板には、上段横棧部分で板の南縁に1箇所、下段横棧部分では北縁に1箇所の計2箇所、4枚目の縦板には、上段横棧部分は縦板が欠損して不明であるが、下段横棧部分は南縁に1箇所、5枚目の縦板には、上段横棧部分で北縁に1箇所、下段横棧部分では南縁に1箇所の計2箇所、6枚目の縦板には、上段下段の横棧部分とも北縁に1箇所ずつの計2箇所に釘または釘を打ちつけた穴が残っている。

西の5枚の縦板の幅は、北側から順に12.5cm、10cm、14.5cm、16.5cm、25.8cmで、厚さはそれぞれ1.5～1.8cmであり、下段横棧上面から縦板の底までの長さは、北側から順に、14.5cm、14.5cm、15cm、16.5cm、17.5cmである。釘の位置は、最も北側の縦板では、上段下段の横棧部分とも縦板の南縁に1箇所ずつの計2箇所、2枚目の縦板では、上段下段の横棧部とも南縁に1箇所ずつの計2箇所、3枚目の縦板では上段横棧部分で南縁に1箇所、下段横棧部分で両縁に2箇所の計3箇所、4枚目の縦板では上段下段の横棧部分とも両縁に2箇所ずつの計4箇所、5枚目の縦板では上段下段の横棧部分とも2箇所ずつの計4箇所となっている。

南の4枚の縦板の幅は、西側から順に8.5cm、14cm、26cm、29cmで、厚さはそれぞれ1.5～2.0cmであり、下段横棧上面から縦板の底までの長さは、西側から順に17.5cm、11cm、19cm、

14cmである。釘の位置は、最も西側の縦板では上段下段の横棧部分とも縦板の東縁に1箇所ずつの計2箇所、2枚目の縦板では上段横棧部分で東縁に1箇所、下段横棧部分で西縁に1箇所、3枚目の縦板では上段下段の横棧部分とも両縁に2箇所ずつの計4箇所、4枚目の縦板では上段下段の横棧部分とも両縁に2箇所ずつの計4箇所となっている。

北の3枚の縦板の幅は、西側から順に26cm、26.7cm、13.5cmで厚さはそれぞれ1.2~1.8cmであり、下段横棧上面から縦板の底までの長さは、西側の縦板から順に5cm、20cm、22cmである。釘の位置は、最も西側の縦板では上段下段の横棧部分とも縦板の両縁に2箇所ずつの計4箇所、2枚目の縦板では上段下段の横棧部分とも両縁に2箇所ずつの計4箇所、3枚目の縦板では上段横棧部分で西縁に1箇所、下段横棧部分で両縁に2箇所の計3箇所となっている。

北の最も東側の縦板のさらに東側には、幅8.5cmと12cmの2枚のそえ木があり、最も西側の縦板のさらに西側には、幅3.3cmのそえ木がある。

横棧は上下の二段が残存しているが、井戸の中から横棧と思われる腐蝕した棒片が6本発見されたので、少なくとも上、中、下3段の横棧が存在したものと推定される。上段の横棧上面と下段の横棧上面との間隔は、東で53.5cm、西で55.3cm、南で54.5cm、北で53.5cmである。下段の東の横棧は長さ75.5cm、幅4.5cm、厚さ3cm、西は長さ75cm、幅4.5cm、厚さ3cm、南は長さ74.5cm、幅4.2cm、厚さ3.3cm、北は長さ74cm、幅4.2cm、厚さ3cmである。上段の東の横棧は長さ74cm、幅4.5cm、厚さ3cm、西は長さ75cm、幅4.2cm、厚さ3.2cm、南は長さ75.5cm、幅4.5cm、厚さ3.5cm、北は長さ75.5cm、幅4.5cm、厚さ3.5cmである。

横棧の四隅での組み方は、東と西の横棧のそれぞれ両端を凸部とし、南と北のそれぞれ両端を凹部として、南と北の横棧に東と西の横棧がさしこまれている。これは上段、下段とも同じ組み方である。凸部の構造は、まず横棧の端から約4cmの部分横棧の上面と下面から切り込み、中央部約1cmを突出部として残し、他は切り落す。さらにこの突出部の端から3cmあまりのところを縦板側から約2.5cmの深さまで切り込み、これに直角にこの切り込んだ深さの面で端までを切り落している。その結果2段のほぞが突出する格好になっている。凹部の構造は、横棧の井戸内側部分で端から約4cmまでの部分を0.4~0.5cmの深さの面まで切り落して、この面の中央部に、横棧を取りつけるのと同じ方向に幅1.3~1.5cm、深さ1cmの溝を掘り、さらに横棧の端より4cmの部分から溝にそって長さ2cmまでを溝幅でもって溝の中に穴をくり抜き、縦板側まで貫通させている。その結果、横棧の縦板側の面は1.3~1.5cm×2cmの長方形の穴になる形となっている。この組み方は、本遺跡においては初めての例である。

横棧の縦板側の面には釘が残っており、縦板と横棧を釘打ちしていたことがわかる。

井戸の中は上部から、礫まじりの砂層、青色粘質土層、砂層となっており、井戸の底には、曲物は認められない。

井戸の中からは、木製薄片、青磁片、土師質小皿および刀子とおもわれる鉄製品などが出土した。(脇坂 光彦)

h C1区第5号井戸

C1区第4号井戸の北西約15mに位置し、芦田川の流水路にあたっており、常時水投している。そのため井戸の保存状態は極めて悪かった。

1辺82～83cmのほぼ正方形の平面をなしており、井筒の縦板は現長50～80cmで、東西各4、南3、北3の計14枚が残存していたが、各縦板の当初の正確な位置は確認できなかった。

東の2枚の縦板の幅は、北側の板から順に34cm、28cmであり、厚さは1.8～2.5cmある。西の4枚の縦板の幅は、北側から85cm、79cm、67cm、89cmで厚さは約1.5cmある。南の3枚の縦板の幅は、西側から順に81cm、60cm、88cmであり、厚さは1.7～2.2cmある。また北の3枚の縦板の幅は、西側から順に68cm、85cm、79cmであり、厚さは1.5～2.0cmを測る。

横棧は何段あったか不明であるが、最下段の横棧と思われる東の棧が縦板にくっついていて、その組み方は棧の両端部が欠損しているためあきらかにできない。また井戸の中には横棧と思われる棒切れが他に2本みられた。

東の縦板の北側の板にのみ井戸内側に横棧の位置の跡が残っているが、その横棧上面から縦板の底までは15～16cmである。

縦板のうち、西の北側から2枚目の板には板の両縁部分で板の底から約11cmのところ1本ずつ計2本の釘が打たれている。また西の北側から4枚目の板には、南縁部で底から10.5cmのところ1本の釘が打たれている。南の西側から3枚目の縦板には、両縁部で底から11cmのところ1本ずつの計2本、北の両側から2枚目の縦板には、東縁部で底から11cmのところ1本の釘が打たれている。

井戸の中からは、備前焼すり鉢(室町期)、亀山焼、白磁片、土鍋、土師質小皿などが出土している。(脇坂 光彦)

i C1区第6号井戸

この井戸は、C1区第5号井戸の北西約20m、護岸より約74mで本中洲の約3m東にあり、1辺約1m余りの方形の井戸であるが、流水中にあるためほとんど原形をとどめていない。

井戸内は、深さ60cm前後になると灰色の砂から青色粘土質の砂層に変わり、かなり多量の礫を
含み遺物がほとんど出土しなくなるので、底に達したものと思われた。

縦板は、幅6.0～10.0cm、厚さ0.1～1.5cm、長さは最も長いもので89.0cmをはかる、幅の狭い
薄板を1辺に十数枚ずつ重ね合わせて井戸枠を構成しており、横棧などはみられなかった。
現存する縦板は、北13、南7、東4、西3であるがその他にも木片が多数みられるところか
ら、その実数はあきらかにしがたい。

底には、曲物が埋め込まれていたが、流水中であるため、原形のまま取り上げることができ
ないほど腐蝕していた。元来は高さ19.5cm以上、厚さ0.3cmのもの、高さ19cm以上、厚さ0.3
cmのもの計二つ以上が組み合わさっていたものようで、高さ19.5cm以上の曲物には内側に4
cmぐらい色の明るい変色していない部分がみられた。また19cm以上の曲物は復元推定径54cmを
はかる。

曲物の内側には、部分的に0.3～1.1cmの幅で斜刻線が入っており、特に合わせられるところ
とその周辺は、斜格子状に刻まれている。合わせ目は外側で幅0.8cm、長さ1.5cmの一重の板皮
によって、0.7～0.8cmの間隔で縫い合わせられている。合わせ幅は、いずれの曲物も約7～8
cmであり、板皮は、外側に合わせられた曲物の端から1.5～20cmのところであり、内側に合
わせられた曲物のそれは、端から5～5.5cmのところにある。19.0cm以上の曲物には、外側の端
より1.5cmのところ縦に1条の切れ目を入れて、板皮で縫い合わせるためのめやすにしている。
また、曲物の内側の端より7.5cmのところ1条とそれから約0.8～0.9cm離れて1条、また0.4
～0.5cm離れて1条の3本の切れ目が縦に入れてあった。

この井戸は、現在では縦板の部分に添木程度の板しかのこっていなかったが、これは、縦板
が流失し添木のみが残存したものか、あるいは、構造が簡略化されたためのものかはあきらか
にしがたい。

井戸内からは土師質土器片、土甎、寛永通宝、それに、室町時代のものと思われる備前焼の
破片が出土した。

(中田 昭)

Ⅱ C6区第1号円形井戸

澁流橋の東端より西へ60m、遺跡包蔵中洲の東端より2mほど東寄りの場所にあった直径約
1mの円形の井戸で、井戸わくの上端は水面下約30cmのところにあった。

内部には、他の井戸と同様、粘土、角礫、円礫などがつまっているうえに、水中の作業で充
分な調査は困難であった。内部の青灰色粘土層からは、竜泉窟青磁片や、備前焼、龜山焼、

土師質土器などの陶磁器、土器のほかに、鉄製の鎌先をはじめんだ痕跡を残す木製の鎌先と柄の一部、刀子、漆器片などが出土した。刀子は某に目釘穴が1個あけてあるもので、漆器は碗の底部で内面は黒漆の上に赤漆がかけられてあり、外面には黒漆の上に赤漆で絵を描いた痕跡がある。さらに底部外面には「サ」の彫り込みがある。

井戸わくの先端より約50cm下方で砂層に達する。この面が湧水面であろう。井戸わくはこの砂層のなかにたてられている。

この井戸もD2区第4号井戸と同じように狭長の板材を連結してつくったもので、D2区第4号の上部をとりのぞいた状態にあたる。

円筒を構成する板材の長さは80cm余りのもので、最も長いものは81.6cmを、最も短いもので79.0cmをはかる。幅は板材の上端では大体5cm、最も広いもので5.7cm、最も狭いものは3.9cm、下端では大体5.5cm、最も広いもので6.3cm、最も狭いもので4.7cmである。厚さは約2cmで、下端は厚く、上端はやや薄くなっている。各々の板材の幅を合計すると、上端の円周は271.6cm、下端の円周は305.2cmとなり、この数値より求めた直径は内法で上端が約87cm、下端は約97cm、その差は10cmとなり、上端がややすぼまる、末広りの円筒形となる。

この板材の木端の上下2箇所長さに1cmのほぞ穴をあけ、ここに竹製のくさびをさしこんで、狭長な板材を連結していることはD2区第4号井戸と同様の手法である。板材を連結するくさびもD2区第4号井戸において使われていたものと大きさ、形ともにほとんど同じのものであり、竹の皮をのこしていた。

ほぞ穴の位置は、上方のものは板材の上端からほぞ穴までは7.3~11.4cmをはかり、下方のものは板材の下端から8.9~14.0cmをはかる。この井戸は低水敷中にあつたためか、上端、下端ともに凸凹があり、隣り合うほぞ穴から板材の上端、下端への距離の差が大きい。また、この井戸の板材には、すべてその両側の木端にほぞ穴があつて、D2区4号井戸の上下の円筒と異なり、すべての板材が相互に竹製のくさびで連結されていたものと考えられる。

この円筒にもD2区第4号井戸同様に竹のたががはめてあつたらしく、板材の外面にはその痕跡がみられた。これによると、たがはD2区第4号井戸と同様のもので、板材の下端より4.5cm、33cm、50.5cm、72cm上方の4か所ところにたがが固定されていたようである。

この円筒の上端の外面がけづりこまれている状況からみれば、上方にもう一段円筒が存在していたらしく、この調整も、それを支え、連結するためのものと考えられ、この井戸がD2区第4号井戸とほとんど同じ構造であつたと推定できた。(伊吹 尚)

k C11区第1号井戸

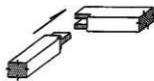
この井戸は、潜流橋の下流約250 mあまりのところの芦田川の東側低水敷の中にあり、本年度調査の小中洲の西端にあった。満潮時には水面下深く没していたが、干潮時には、砂に埋ったその上部を見せていた。しかもその西側は川床が急に深くなっており、井戸の西側と北側は常に流水に洗われている状態であった。

外法の1辺が約90cm、深さ110cmの木組みの方形井戸で、縦板(外板)は中惣されて上段と下段の2つに分かれている。上段の縦板はほとんど流されており、下段は、現存長約110cm、幅30cm、厚さ3cmほどの比較的頑丈な板が各辺に3枚づつあった。横棧(内枠)は、3段あり、上から1段目のものは、上段の縦板を内側から支える役目をしている。2段目の横棧は、上段の縦板を支えるとともに上段の縦板と横棧をその上にのせている。1段目と2段目はがたがたでかなりいたんでいるが、3段目のものはしっかりしている。なお、隅柱(角柱)や曲物はなかったが、縦板の外側には、かなりの数のそえ木がしてあった。井戸内には、有機粘質土が底まで堆積しており、縦板の下端部分は湧水層の砂層となっている。掘り方は、井戸の東側のところは残っていたが、その他は流されて不明である。残存部から推定すると直径1.3 m前後のほぼ円形の掘り方とおもわれる。

上段の縦板は、井戸の北側の東端と東側の南端に各1枚、南側東端に2枚、小片が残っているのみで、他は全て流失している。その大きさは、現存長30~40cm、幅7~27cm、厚さ2cm前後あり、いずれも底部は水平に切っている。縦板の表面は、いずれもきれいに削ってあるが、南側に残っている2枚の縦板の内面は、やや荒く、板を縦に割ったような縦筋がついている。縦板はいずれも^〆目となっている。

下段の縦板は、内面はきれいに削りこんでいるが、外面は荒削りで、0.5cm前後のごぼこの面になっている。また上から2段目の横棧を固定したところは、縦板の腐蝕により4cm幅で、0.5cmあまり張り出している。そこに横棧が打ちつけられている。各板には釘2本を打ちつけており、縦板と横棧には釘の小片とその痕が残っている。3段目の横棧を固定したところには、張り出しは見られず、釘を2本打った痕がみられる。釘は、2段目の横棧にあったものとほぼ同位置で板の端から4~5cmのところ1本ずつ打ちつけられており、釘と釘との間隔は20cm前後である。縦板の底部は、大体水平に切っているが、北側、東側、西側の各1枚と南側の2枚は、角を切り落して、やや丸い形をしている。板はかなりしっかりしたものを使用している。

横棧は、1段目は、下段縦板の下端から92cm上のところにあり、2段目はそのすぐ下で、3段目は、2段目から56cm下で、下段縦板の下端から25cmのところにある。1段目の横棧は、1辺が長さ78～82cm、幅10cm、厚さ6cmの大きさのもので、南側と北側の両端が凸形、東側と西側の両端が凹形になっている（第8図）。凸部は、先端から7cmで井戸の内側に向く面から1cmほどのところの長方形の面を先ず切り落しており、その後、先端から5cmのところを、中央部を2.3cm残し、その上下を1.6cmの厚さで切り取って凸形にしている。凹部は、先端から9.5cm、井戸の内側に向く面から2cmほどの長方形の面を先ず切り落し、その後、凹形先端の中央部を長さ7cm、上下幅2.5cm、奥行9.5cmで、横棧の外側の面が1.5cm幅ほど残るようにえぐり貫いている。つまり凹部は、全部は開いておらず、凸部先端をおさえるような形になっている。横棧は側面が柵目になっている。東北部の凹凸の造りは丁家であるが、その他はやや粗雑で、両端部が腐蝕し、凹凸が欠失しているものもある。また、西側と北側の横棧は、中央部もいたんでおり、断面が丸くなっている。



第8図 C11区第1号井戸横棧の組方

2段目の横棧は、1辺が長さ88cm、幅4cm、厚さ5cmの大きさで、南側と北側の両端が凸形、東側と西側は凹形になっている。凹凸の造りは簡単で荒く、横棧4本を組み合わせると、凸部の先端が外に突き出てしまう。横棧中央部の断面は方形ではなく、縦板についている側は角を残しているが、内側に面した水に洗われる部分は角がとれて丸くなっている。下端よりも上端の方がより丸味を帯びている。

3段目の横棧も同様に南側と北側の両端が凸形、東側と西側が凹形である。

つぎにそえ木であるが、北側13枚、東側5枚、西側9枚、南側5枚の計32枚が残存していた。これは湧水などの流入を防ぐためのものとおもわれる。大きさは、現存長30～100cm、幅4～10cm、厚さ0.3～0.5cmの薄い板で、底部はほぼ平川である。

井戸から出土の遺物は、他の井戸と比べて少ないが、底までつまっている有機粘質土の上部からは、犬の頭蓋骨、土師質土器の小皿が出土し、その下部からは、青磁片、亀山焼片、土師質土器片、釘、漆器片、梅の実、松かさなどが出土した。

（山県 元）

I D2区第4号井戸（図版7、第9図）

昨年の調査区域において、新たに発見された井戸の一つで、調査区内にあった数本の流路の内に埋没していたものが、その後水に洗われて、姿をあらわしたものと推定される。

井戸は円形に近い楕円形で、井戸の内法ではかると、長軸は94cm、短軸は76cmで、北側がやや尖って、卵形に近い形をしていた。本来は円形であったものが、周囲からの圧力でゆがめられて、このような形になったものとおもわれる。

内部には、他の井戸同様、砂をまじえる青灰色粘土がつまっていたり、井戸わくの上端より、下方へ約123cmでわくの下端に達し、このあたりが湧水面となっている。青灰色粘土層からは、竜泉窯青磁片2、備前焼の甕、土師質小皿の破片、内耳付の土鍋片などとともに、曲物の底とおもわれる直径約13cmの円板が出土している。

この井戸は外側に竹製のたがをはめた2つの円筒を重ねて、井戸側としており、ちょうど、桶の底をぬいて、桶側を積み重ねたような状態である。

下方の円筒は、長さ72.6~73.7cm、幅は上端で3.3~5.3m、下端で3.8~5.9cm、厚さ約2cmで、上端が薄く、下端がやや厚くて内反する板材を60枚、横に連結してつくっている。各板材の幅を合計すると、上端の円周は約261.4cm、下端のそれは305.4cmとなる。これをもとに直径を計算してみると、内法で上端の直径は約83cm、下端のそれは約97cmとなって、その差は14cmあり、上端がややすぼまり、底をぬいた桶側をふせた状態となる。

そして、この板材の木端の上下2個所に長さ1cmのほぞ穴をつくり、ここに竹製のくさびをさしこんで、板材を連結している。くさびは長さが約5cmで、両端は尖っていて、最大幅は約1cmをはかり、それがくさびの中央部に位置するようにつくられている。ほぞ穴は、上方の穴で、板材の上端よりも下方へ8.8cm~12.6cmの範囲内に、下方の穴は板材の下端より上方へ9.0~13.8cmの範囲内にあけられている。

隣り合う板材のほぞ穴の位置について考えてみると、上方の穴では、板材の上端からの距離の差が最大で5mmをはかり、ほとんど差がないのに対して、下方の穴ではその差が4mm以上あるものが59組中19組もあり、最大のずれは1cmである。したがって板材の上端はほとんど一線をなすが、下端においてはそれがみられないことになる。また、板材の木端の片側にほぞ穴のないものが2枚あり、くさびによる連結は円周の1個所ではおこなわれていなかったことがうかがえる。



第9図 D2区第4号井戸復元図

上方の円筒は、板材の下端ではば4.1~5.9cmのものを54枚連結して作っている。この円筒の上部は腐蝕しているので、全長は詳らかにしがないが、現存長は最高62.5cm、最低46.5cmをはかることができる。

この円筒も板材の連結方法は下方の円筒と同じで、板材の木端には、下端より9.6~15.5cm上方にほぞ穴があり、ここに竹製のくさびをさしこんで板材を連結する技法がみられる。本来はこの穴の上方にもう一個所、ほぞ穴があり、ここにもくさびをさしこんで連結していたのであろうが、その状態は詳らかにしがない。

この円筒においても、隣り合うほぞ穴の位置は、板材の下端からはかると差が大きく、板材を連結した場合、その下端は不揃いであつたらしい。この点から考えると、この円筒は既製の樽や桶の底をぬいて、それを利用したものではなく、最初から井戸筒として作成されたものであると考えることができる。また、この板材のなかに、その片側の木端にほぞ穴のないものが1枚ある。これに組み合う板材がないことから、この円筒もまた1個所は連結されていなかったようである。

この2つの円筒の外側には、幅2cm余りの割竹を3本編みあわせてつくった幅4cmほどのたがが、下方の円筒には3個所、上方のそれには2個所はめてあつた。下方の円筒にまかれたたがは、それぞれの上端が円筒の上端から、下方へ5cm、26cm、29.5cmのところの3個所に、上方の円筒では、円筒の下端より上方へ15cmと39cmのところにとがの下端がくるように巻いてあつた。

2つの円筒の関係についてみると、下方の円筒の上端が上方の円筒の下端の内側にはまわって、2つの円筒の重なりは約9cmであつた。

また、2つの円筒の内側では、下方の円筒の上端よりも上側は板材が薄くなっている。これは水をくむ際に桶があつたためではないかとおもわれる。このことからみて、2つの円筒のつぎ目付近に水位があつたものと推定される。

(伊吹 尚)

m D2区第5号井戸

D2区第4号井戸の南約13m、東側の渡岸より約31mのところと位置し干潮の時に砂洲となる南西端にあたり縦板の一部が若干のぞいていた。井戸は内法東西89cm、南北88cmの方形の木組み井戸である。

井戸周辺を若干削平したところ東西径約191cm、南北径約194cmのほぼ円形をした掘り方があきらかにされた。井戸はその掘り方の南東方に位置し東側から約28cm、南側から約35cmをはか

るところにすえられている。構造は、上、下、二段の横棧の周囲に縦板とそえ木を配したものである。

縦板は、北12、西6、南4、東4の計26枚からなり横棧に1本ないし2本の釘でとめている。縦板は、ほとんどが、幅10.0~17.2cm、厚さ0.2~3.2cm、長さ9.30~113cmをはかるものであるが、北側のものは、西から4枚目からは、幅3.8~5.3cm、厚さ2.4~3.5cm、長さ76.0~83.5cmの断面が正方形に近い木を9本置いている。9本のうち上、下の横棧に釘が1本ずつ打ちつけてあるが、上段の横棧に打ちつけてないものが4本ある。

東端のものは、上段にも下段にも釘が打ちつけてなく、その西隣りの縦板に横から1本の釘で打ちつけられている。縦板の内側は、カンナで丁寧に仕上げられているが、外側は、斧状のもので縦に荒く割ったようでその痕跡が著しくそのため、厚さは一定しておらず、厚く、凹凸の激しいところは、ちょうな等で整形している。底は斧状のもので打ち切られたものらしく、平坦ではなく不定の方向より切られた凹凸がみられる。また縦板の下端は、一様に整ってなく、最も長いもので、下段の横棧の上面より21.0cm、最も短いもので5.5cmをはかる。

縦板のそれぞれの四隅の合わせ方は、一方の縦板の内面に、他方の縦板の木端が合わさり、その関係はそれぞれの隅で交互になっている。

つまり、北側の東端の縦板の木端は単側縦板の内面に密着し、東側の南端の縦板の木端は、南側の東端の縦板の内面に合わせられている。

そえ木は、縦板の継ぎ目に置かれ南側に3、東4、北9、西9の合計25枚であるが北側の細い縦板には置かれてないものがみられた。幅は、4.1~6.0cm、厚さは、0.2~1.5cmであり、長さは縦板よりも若干短いものである。また縦板はほとんど釘1本で止めてあるが、北側と西側のそれぞれ5枚、7枚のそえ木には全く釘が打ちつけられていなかった。

横棧は、上、下二段であるが、上段の上面から下段の上面までは、52cmほど離れていた。上下段ともその厚さは、3.5cm、幅は7cmであり、ほぞで組まれている。

上段は、北側と南側に凸部、東側と西側に凹部をつくり、組み合わせられている。凹部は、上段で深さ1.2~1.4cm、下段で深さ1.5~1.6cm、端からいづれも横棧の幅だけの切り込みを内側に持ち、端から3.5cm、上、下面からそれぞれ

0.7~1.0cmのところ縦1.5~2.1cm、横3.5cmの穴をあけ、内側から外側まで貫通したほぞ穴をつくり、凸部を差し込むようになっている。凸部には、継ぎ合わせたのち、外側から木製のくさびを外側に近いところに打ち込んでいる。



第10図 D2区第5号井戸横棧の組方

の区分方法に従って、D3区のa、f、k、Pの4グリッドの一部を調査することにした。堆積土をはいでいくと、地表下60cm足らずのところから生活面と思われる暗褐色粘質土層があらわれてきた。fグリッドでは、0.1~0.5cm大の木炭片が暗褐色土に混ってかなり広い範囲に分布しているところがあり、付近から青磁、鉄釘、滑石製の鍋の口縁部、土師質土器の小皿、土鍋、亀山焼などの破片が出土した。kグリッドでも、同じ面から、竜泉窯などの青磁、白磁、すり鉢、鹿の歯、備前焼、須恵器、土師質土器の小皿、土鍋などの破片が出土した。とくにkグリッドとfグリッドの間あたりからは、小皿の完形品やそれに近いもの6点、青銅製の樋口、判読不明の古銭1枚などをはじめとして、かなりの遺物が出土した。Pグリッドでは、青磁、常滑焼、亀山焼、滑石製の鍋、などをはじめ、宣和通宝1枚、洪武通宝1枚、判読不明の古銭2枚が出土した。このように、杭列の西側の地域は比較的よく残っていたが、東側はほとんど流失していた。この生活面が、室町期にあたるものか、鎌倉期まで下るものかどうかは、調査が狭い範囲に限られていたことと、流水による土層の攪乱のため、はっきりしないが、出土遺物からみて鎌倉期のものとみてよいようである。

つぎに、杭列の性格を明らかにするため、まず、杭の掘り方を掘り下げて行った。杭列は、北から西に32°の角度でほぼ一直線に並び、水ざわから約30mのところまで、杭は全部で58本残存していた。掘り方は杭の周囲にごく一部だけあることが明らかになった。このことからみて、杭列は、1965年度発掘調査の時、石敷道路の南側にほぼ平行した杭列をもつ小溝と、それに直交する南北方向の3本の小溝によって3つに区切られた住居区画をなす遺構があらわれているが、そのうち南北方向の小溝にある杭列と何らかの関連があると推定された。

杭と杭との間隔は、大体50cm前後であるが、なかには1m以上の間隔をもつところもあった。杭の打ち込まれている地面は、最初の暗褐色土層の生活面より60cmあまり低く、地表より約120~130cm下であった。杭の上部は流水のためすり減っており、遺構面から5~50cm前後頭をのぞかせている状態であった。杭の太さは、10~12cm大であり、遺構面より50cmぐらい埋め込まれていた。遺構面より上部では、杭は丸いが、下は荒く不規則に6~11面体に削られて多角柱になっていた。

また、杭列の調査を行なっている際、北側より約10mのところから、井戸の掘り込みがあらわれた。掘り方は、径2.5m前後のものの中に、径1.3mあまりの円形の掘り方があり、二重のようであった。内側の掘り方は、杭列の東約50cmのところであり、青色粘土がつまっており、中から南北84cm、東西90cmの木組み方形井戸の縦板があらわれた。井戸の北側の面は東北方向に向いていた。井戸は、縦板と3段の横板からなっており、縦板は、上から1段目の横板より

下が二重になっており、外側の縦板は、南側が4枚で、他の側面はすべて3枚からなり、内側の縦板はすべて3枚づつであった。西側の縦板は土圧のため、内側に曲がり、弧形を描いて、4cmあまり内側に張り出していた。

1段目の横棧の上面は、縦板の下端より、77cm上にあり1段目と2段目の間は16cm、2段目と3段目の間は50cm、3段目から縦板の底面までは11cmあった。外側の縦板の大きさは、長さ110cm前後、幅15~30cm、厚さ2~3cmで、上端部はすり切れていた。内側の縦板は、長さ90cm、幅20~30cm、厚さ2cmで、1段目の横棧をその上に乗せていた。1段目の横棧は、南側と北側の長さが82cm、東側と西側の長さが78cmで、幅はいずれも5.5cm、厚さ6cmであり、2段目の横棧は、幅5cm、厚さ7cm、3段目の横棧は、幅4cm、厚さ7cmであった。土圧のため、2段目と3段目の横棧は、井戸の内側に弓状に張り出していた。

井戸内は、暗灰色ないしは黒色の粘質の有機物腐蝕土がつまっており、礫は非常に少なく、出土遺物は、土師質土器や、灰釉のよくかかった備前焼の口縁部、亀山焼の破片などとともに、木製卒塔婆、ドングリの実などが出土した。

以上みてきたように、枕列は、1965年度調査の南北方向の小溝の枕列と関連があるものと推定できたが、詳細は本中州の調査を待って検討したい。また杭と井戸との関係についても、流水のため荒されており、切りあいの状態もはっきりしないので、その先後関係はあきらかにできなかった。

(山泉 元)

Ⅲ 出土遺物

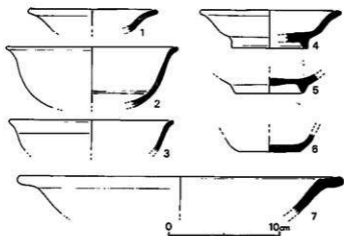
a 陶磁器・土器類（図版11・12a、第12・13・14・15図）

陶磁器

今年度の調査により出土したものは、今までに出土しているものとほとんど同じであり、中国関係の陶磁器では青磁を中心に青白磁、白磁などが出土している。

①青磁—器形としては皿と碗状のものがある。

皿（第12図）—1は口径11.7cmのもので口縁部がラップ状に外反している。4は口径12.9cmのもので形は1に類似している。高台の部分には軸がかかっていない。5は皿の底部で高台は下部がわずかに内反しており、先も細い。7はかなり大きな皿で口径が29.6cmもある。口縁部はきつく外反しており口唇部の2cmほどは平川な面となっている。黄緑色を呈しており軸も厚い。いづれも竜泉窯の製品で胎土は灰白色を呈し軸も1mm前後と厚い。



第12図 中国製陶磁器類実測図

碗（第12図2, 3）—2は口径15.5cmのもので内側見込み部近くに2本の凹線をめぐらしている。3も口径14.8cmの碗で口縁下はとくに軸が厚い。

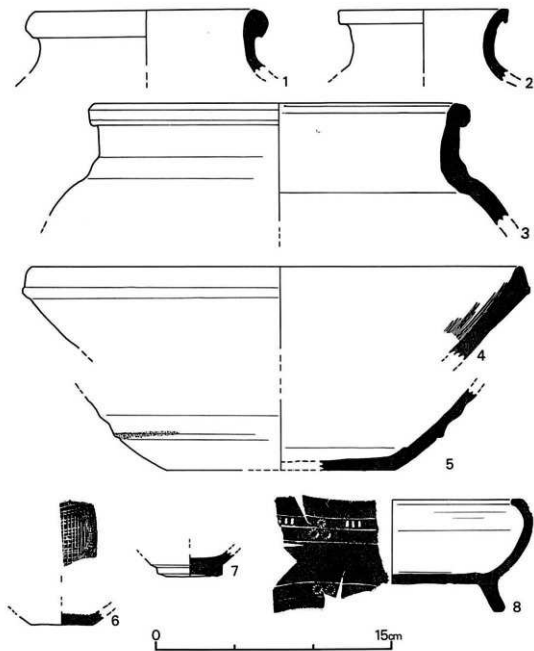
②青白磁（第12図6）—景徳鎮窯の青白磁の底部で厚さは6mmある。全体に軸はうすいものである。

日本の陶器関係もいま

まで出土したものと同じで備前焼、瀬戸焼、常滑焼などがある。

①備前焼（第13図1～4）—酸化焼成による特有の色をなしているものである。

甕（第13図）—1は口径14cmの甕の口縁部で焼成はよい。口縁部は玉縁をなすが断面は丸形に近く鎌倉初期のものとおもわれる。3は須恵器に近い灰色を呈している。口径は23.6cmあり



第13图 福前院・瀬戸焼類(美濃国)

玉縁も丸く1とほぼ同時期のものとおもわれる。2はO3区第1号井戸の中から出土したもので口径が10.8cmある。時期としては1,3よりかなりくだるものであろう。

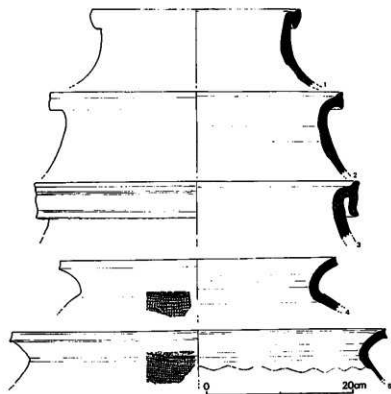
すり鉢(第13図4)一器内側に9条づつの刻線の入るもので口径が30.4cmある。口縁部はやや内曲ぎみに立ちあがっており、色は茶かっ色を呈する。

②瀬戸焼(第13図5~7)

鉢(第13図5)一底部は平底で径は14.4cmある。底から2cmの高さのところまでは軸がかからず水ひきの痕が顕著である。胎土は灰白色で釉は黄緑色を呈している。

おろし皿(第13図6)一底部で内側に幅1mm、深さ0.5mmのすじが縦横に走っている。底部は平底で3.8cmを測る。

底部(第13図7)一茶わんの底部とおもわれるものであるが色は黒色で黒天目茶碗とよばれるものであろう。底部ははりつけて径は4.1cmで胎土は白い。底部はうるしてもってついだ痕跡があり、1回壊れたものをついで再使用したもののようである。



第14図 常滑焼・亀山焼実測図

③常滑焼(第14図1~3)一いづれも口縁部に特徴のある型で1は口径が28.3cmある。口縁部の下がり小さく鎌倉期のものであろう。2も口径40cmの型で形としては1と類似しているが口縁部の厚さは1より小さい。3は室町期の常滑焼口縁部の特徴をしめしており口径は44

cmあるが口縁部のたれ下がる部分の幅が5cmとひろい。茶かっ色を呈し、D3区暗褐色土層から出土した。

④亀山焼(第14図4・5)一甕の破片で表面に格子目のたたきをもつものである。4は口径が37.6cmのものであるが胎土には砂粒が多い。5は口径51cmの大甕の口縁部で器内側肩部につぎめがあり、その部分には指による調整のあとがのこっている。

土師質土器(第15図)

碗—器形からつぎの5つに区分できる。

(a)丸底で器高が3cm前後のもの。(b)平底で器高が2~2.5cm前後で皿に近く口径に比して高さのひくいもの。(c)口径に比して底部の径の小さいもの。(d)底部がくぼみ底となっており口縁部がやや内曲するもの。(e)高台の付いたもの。

(a)は口径が10cm前後、器高が3cm前後のもので口縁部がラッパ状に外反する丸底のものである(第15図1~4)。

(b)は、口径が11.5cm、器高が2~2.5cm前後のものが多く口径に比して高さが低く底部は平底に近く粘土をはりつけて整形している(第15図5~8)。

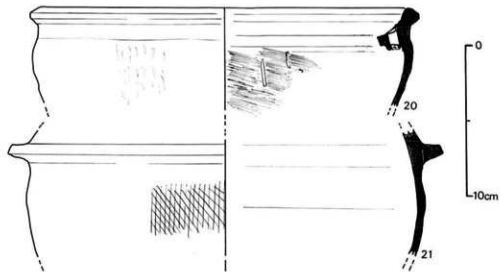
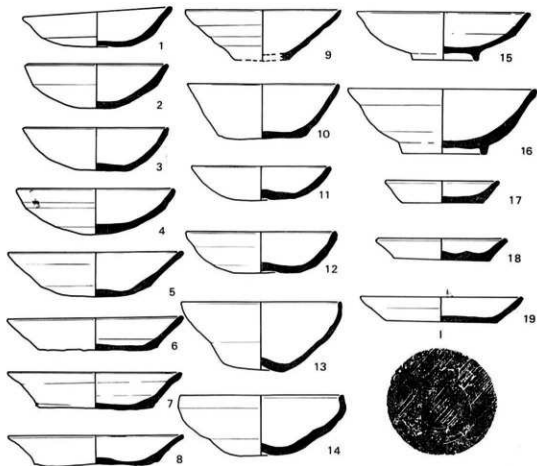
(c)は口径が10cm前後のものであるが、口径に比して底径が4~6cm前後と小さい。表裏とも刷毛による調整を行ない器の厚さはうすい(第15図9.10)。

(d)は底がくぼみ底となっているもので口径が10cm前後のもの(11.12)と12cm前後のもの(13.14)とがある。前者は器高が2.5~3cmある。後者は4.5cm前後あり口縁部がやや内わんしている(第15図11~14)。

(e)は高台付のもので口径が11.5~12.5cmのものが多く(a)に高台をはりつけたものとおもわれる。高台の高さは5mmある。口縁部は、わずかに外反しており焼きもよい(第15図15.16)。

皿(第15図17.18.19)一燈明皿とよばれているもので、17は口径が7.6cm、高さが1.5cmある。糸切底で焼きもよい。18は口径が8.6cm、高さは1.5cmある。19は、口径10.8cm、高さが1.7cmあり底には板目がのこっている。

鍋(第15図20)一口径24.6cmの鍋で、口縁下3cmのところから上部はS字状に彎曲しており口縁部は肥厚している。内側は上端から2cmのところを耳をはりつけており径6mmの穴が2個



第15圖 土師質土器実測圖

穿たれている。表面にはへらによる調整痕がのこり、全体に煤が附着している。

罍釜（第15図21）—胴部の径が26.6cmある釜で表面に斜格子のたたき目がある。罍は幅1.3cm、厚さ9mmのものをはりつけている。

瓦 質 土 器

火舎（第13図8）—口径が16.6cm、高さが7.1cmのもので脚をつけている。脚は3脚のようである。口縁部は内曲しており、最大径は上端より1.5cmのところであり18cmを測る。口縁から下、0.4cm、1cm、2cmのところにはそれぞれ巾1mmの凹線があり、そのあいだに菊花文と長方形の刺突文の押型が配されている。また下から2.8cmと、2.2cmのところにも凹線をめぐらし、そのあいだに菊花文を押しつけている。ろくろによる整形痕をよく残しており、焼成もよい。（河瀬 正利）

b 石製品・土製品（図版12b、第16図）

砥石（第16図1）—O4区第1号井戸より出土したものである。多面体で、使用面は3面残っており、その面の最大幅は5.5cmと5cmと3cmである。砥石自体の大きさは、現存長約6cmで、淡灰白色の砂岩である。砥石片は同じ井戸よりもう1点出土した。大きさは、3.5cm×3.5cm×3cmで、淡灰白色の砂岩である。

石臼—O4区第1号井戸より出土したもので、上下2つに分れた製粉用の石臼の上部の一部と推定される。推定直径33.5cm、中央部の厚さ約7cmの大きさで、現存しているのは、石臼の上部の4分の1弱である。臼の上面は、やや内くぼみで、周囲に幅3.5cm、高さ0.6cmの縁どりの跡が残っている。側面は、やや内すばまりで、下端は上端より0.5cm引っ込んでいる。臼の下面には、中央部に直径3cmの穴があるが、石臼を回転させるための中心棒を差し込む穴と思われる。また下面は、半径約8cmの円周部を最深（深さ0.8cm）として、ゆるやかな傾斜の溝がぐるりと回っており、その外側の8cm幅の円周には、長さ約6cm、幅1cm、深さ0.3cmあまりの溝が、約1cm間隔で、数本づつ、円周の内側から外側に向けて彫り込まれている。溝と溝との間の凸部は磨滅していた。また石臼の表面は、上面部を除いては灰黒色を呈していた。

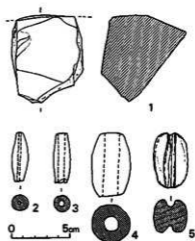
石鍋—枕列のあったD3区fグリッドより出土した。滑石製の鍋の口縁部で、現存部は厚さ

1cm、幅4cm、長さ9cmの大きさである。口縁部から1.3cm下に、厚さ0.8cm、幅0.8cmの鈿がついている。鍋の外側の面には煤がついていた。滑石製品は、同じ地点からもう2片出土した。そのうち1つは厚さ1.7cmで、やはり外側の面に煤がついている。

土錫（第16図2～5）—C1区第6号井戸より1個、O3区第1号井戸より1個、O4区第1号井戸より1個、D3区Pグリッドの暗褐色土層から1個の合計4個が出土した。2、3は、比較的小型で、両方とも長さは4cmあまり、太さは中央部の一番太

いところが1.4cm、両端部の細いところが0.7cmあまりである。重さは、2が6.7gで3が7.9g。紐を通す穴は、2が直径約2mmで、3が直径4mmである。色調は、前者が淡赤褐色、後者が乳褐色で焼成は、いずれも良好である。4、5は、少し大型で、長さは4.5～5cm、太さは中央部で約3cmである。4は、先端部の太さが2.2cmで、直径1.3cmの丸い穴があいている。重さは56gあり4個の土垂錫のうち一番重い。色調は、淡灰褐色で、焼成は良好である。5は、両側に紐を結びつける溝があり、その大きさは幅、深さとも5mm前後である。

（山泉 元）



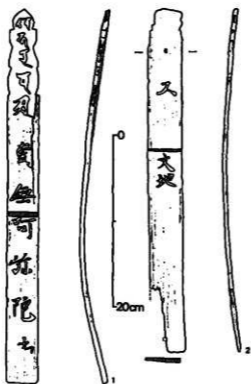
第16図 石製品・土製品実測図

c 板碑・木製品類（第17・18図）

今回の調査で出土した木製品には板碑・鎌先・櫛などがある。

板碑（第17図1.2）—草戸千軒町遺跡はじめての発見でD3区第1号井戸から2基出土したものである。1は全長が44cmの卒塔婆で上端から12.5cmのところまでに梵字（空・風・火・水・地にあたる）が書かれており、その下には南無阿弥陀仏と墨書されている。

上端から10cmのところまでは両側から刻まれ五輪塔の形状に似ている。幅は中央部で3.6cm、厚さが5cmの板で上面へ彎曲している。2は全長40cm、幅4cm、厚さ3mmの板で上端から5cmのところと下から1cmのところを径4mmの孔を穿っており、何かに結びつけていたものとおもわれる。上部から10cmのところと中央部に文字がある。墨が消えて判読しがたいが「南無（梵字のか）文（梵字のか）地（梵字のか）藏（梵字のか）菩薩」と墨書されているようである。



第17図 板 葬 火 葬 器

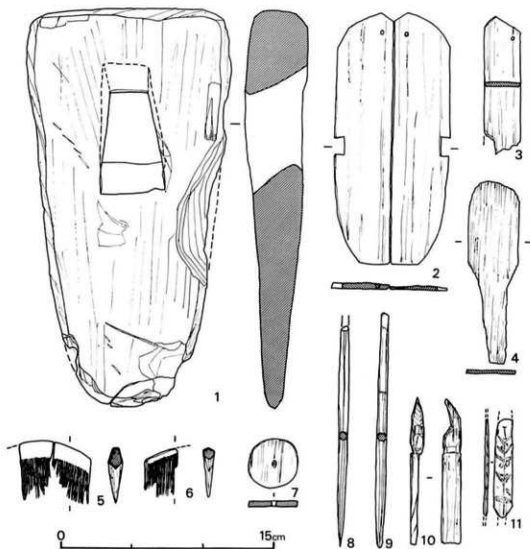
銀先(第18図1) — 全長が28cm、幅は上部で14cmある。縁辺部には幅5mmの面とりがなされている。刃部は両側から削られて半円形をなしており、上端から6cmのところには、柄を装着するための長さが7.3cm、幅が上部で2.8cm、下部で4.5cmの長方形のくりぬき孔がある。先端部には、鉄製の刃が装着されていたものようである。

櫛(第18図5.6) — 頭部が半円形をなすもので5は櫛幅が5mmある。歯の長さは2.5cm、厚さは0.5mmある。

櫛の断面をみると、菱形に近く、歯の基部が一番厚く1.1cmをはかる。歯は、頭部の両側から斜めに削られているため中央部はV字状をなしている。

とめぐし(第18図8.9) — 屋根を葺くときに使われたとおもわれるとめぐしで長さはおおよそ20cm前後のものである。断面は六角形で厚さは6mmを測る。

ひとがた(第18図10) — 1969年度の調査のさいに出土したものに類似している。頭部の刻み



第18図 木製品・骨製品実測図

ははっきりしないが烏帽子を冠ったひとがたである。長さが、10.2cm、幅は、1.4cmある。

糸巻（第18図7）一径が3.5cm、厚さが4mmの円形のもので中央部に径2mmの孔が穿たれている。石川県普正寺遺跡においても同様な例の発見がある。（注、石川考古学研究会「普正寺」1970年）

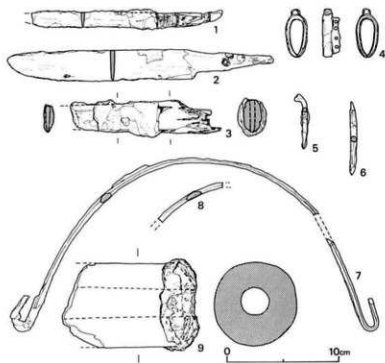
杓子状木製品（第18図4）一長さが12.8cmのもので杓子状を呈するものである。先端部は幅が3.5cmあるが中央部から下は、両側から削られて柄状となっている。厚さは3cmある。

この外、第18図2.3のように幅4cm、長さ17.8cmの2つの板をつぎあわせ先端部はV字状に削り、その下に2つの孔を穿っているものがある。隅は丸く長楕円形をなしており、また両端の中央部をコ字型にえぐり込んでいることからみて蓋のようなものかもしれない。

骨製品（第18図11）—D4区第1号井戸より出土したもので両端が欠損しているため、全長は不明であるが、長さ7cmをのこす。幅は上端部で1cm、下端部で1.4cmある。表面には、花模様様の線刻がある。下端部は、両側から削られ細くなっており、全長15cm前後の筭（さし）のようである。厚さは1mmであるが、表面には鱗がつくられており、断面は中央がわずかに高く山形をなしている。（河瀬 正利）

d 鉄製品・銅製品（第19図）

刀子（第19図1.2）—C6区第1号井戸とC1区第4号井戸から一本づつ出土した。2は、全長23.5cm（うち茎の長さ6.9cm）、幅2.7cmで、反りはみられない。厚さは、棟部が3.5mmである。目釘穴は、径0.4cmで、茎尻から4cmのところの1つだけある。反りが見られな



第19図 鉄製品・銅製品実測図

いかわりに、棟は、切先から3cmのところからゆるくカーブを描いている。茎には、よく木目が残る鉄製の刀子である。

1は、現存長16.5cm（うち茎の長さ6cm）、幅1.4cmの細身のもので、厚さは背部が3mmで、反りはみられない。先端部は欠けていて不明である。茎には、厚さ0.5mm前後の薄木片がくっついており、その上を黒漆で塗り固めている。目釘穴は、径2mmで、茎尻から3.3mmのところ

に1つある。

茎（第19図3）—O2区第1号井戸より出土したもので、現存長は13.5cm、うち茎の長さは5.8cmを測る。茎の幅は1.5cm、厚さ0.5cmで、目釘穴（推定径0.4cm）のところで折れている。茎には、黒色に腐蝕した鋼の部分の木片が付着している。刀身の部分は、幅2.3cm、棟幅は0.4cmである。

鑊口（第19図4）—D3区の暗褐色土層から出した青銅製の鑊口である。内径は、縦3.1cm、横1.2cm、外径3.8cm、横1.9cmで、刀身を入れるため長円形をしている。厚さは、0.8cmで、背部には径0.3cmの円形の穴のある青銅の輪がついている。青銅板の厚さは1mm足らずで、表面には緑青が出ている。

釘（第19図5、6）—C1区第5号井戸から出土したものである。5は、長さ5cm、太さ0.4cm、断面は正方形で、頭部分が曲っている。6は、現存長6.5cm、太さ0.5cm断面は円形で、頭部分は欠失している。

鍋の把っ手（第19図7、8）—D2区第5号井戸より出土したものである。幅13cm、中央部の厚さ0.5cm（両端部は0.3cm）の縁が丸味を帯びた細い鉄棒を曲げて作っており、両端を2.5cmほど外側に曲げて、鍋を引っ掛けるようにしている。把っ手の両端の間隔は31cm、把っ手の基部より中央までの高さは14.5cmある。把っ手の断面は山形で、中央部が一番高い。

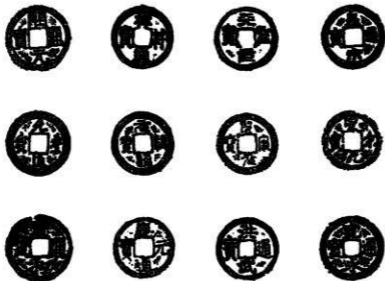
鑊の羽口（第19図9）—O4区第1号井戸より多量に出土したもので、9は現存長12cm、外径7.3cm、内径2.7cm（口の方は少し狭くなっており、内径2.4cm）の大きさの円筒形の羽口である。口の部分は、黒くガラス状に熔融しており、その周囲は黄色味を帯びている。またこの部分には1mm前後の小さな穴が泡つぷ状にあいている。羽口が高熱に耐えるため管先に巻かれている粘土は、管先が黒く熔融しているため、ほとんど見分けることができない。胎土は、灰褐色で、石英粒を多数含んでいるが、口に近い部分は高熱のため赤褐色化している。また羽口の表面と内面も黒く焼けている。

（山泉 元）

● 古 銭

本年度の発掘調査で出土した古銭は、台風による調査区域の流失などのために、非常に少なく、総計27枚である。その内訳は、唐銭が1枚、宋銭が14枚、明銭が1枚、日本銭（寛永通宝1種類のみ）が5枚、判読不明のものが6枚である。出土場所別にみると、井戸内より出土したものが8枚、D3区の枕列周辺より出土したものが7枚、表面採集によるものが12枚である。さらに細かくみていくと井戸内より出土したものは、O1区第1号井戸より元祐通宝が1枚と寛永通宝が2枚、O4区第1号井戸より元豊通宝が1枚と寛永通宝が1枚、A0区第1号井戸より皇宋通宝が1枚、A0区第2号井戸より祥符通宝が1枚、C0区第1号井戸より寛永通宝が1枚である。枕列周辺より出土したものは、fグリッドの枕列より開通元宝が1枚と元豊通宝が1枚、kグリッドより判読不明のものが1枚、pグリッドより宣和通宝が1枚と洪武通宝1枚、判読不明のものが2枚である。

これらを検討してみると、出土枚数こそ少ないが、地域的には発掘調査地域のほぼ全般から出ているし、時代的にも初鋳年代が宋代のものに集中している。これは、この遺跡の最も栄えた時期が、宋銭が主として用いられた鎌倉時代であることを物語っている。第3次発掘調査（1965年度）から今回（1970年度、第6次）の発掘調査までに出土した古銭の種類別分



第20回 古 銭 拓 影

類を行なってみると、宋（北宋）代に鑄造されたものが最も多く、判読できるもの220枚（出土総数261枚）中176枚（24種）にのぼることからもうかがえる、

（山泉 元）

第1表 草部千軒町遺跡出土古銭の種類別一覧表

古 銭 名	初 鑄 年 (西暦)	1965年	1968年	1969年	1970年	合計枚数
		出土枚数	出土枚数	出土枚数	出土枚数	
1 貨 泉	新 天 鳳 元 年 (14)	0	1	0	0	1
2 開 元 通 宝 (閉)	唐 武 德 4 年 (621)	1	11	1	1	14
3 太 平 通 宝	宋 太 平 興 國 年 間 (976 ~ 983)	0	0	1	0	1
4 淳 化 元 宝	宋 淳 化 元 年 (990)	0	1	0	0	1
5 重 道 元 宝	宋 重 道 元 年 (995)	0	3	2	0	5
6 咸 平 元 宝	宋 咸 平 元 年 (998)	1	1	0	0	2
7 景 德 元 宝	宋 景 德 元 年 (1004)	0	1	0	0	1
8 祥 符 元 宝	宋 大 中 祥 符 元 年 (1008)	1	5	0	0	6
9 祥 符 通 宝	宋 大 中 祥 符 元 年 (1008)	0	2	0	3	5
10 天 禧 通 宝	宋 天 禧 年 間 (1017 ~ 22)	0	5	2	0	7
11 天 聖 元 宝	宋 天 聖 元 年 (1023)	2	8	1	1	12
12 天 聖 通 宝	宋 天 聖 元 年 (1023)	0	1	0	0	1
13 景 祐 元 宝	宋 景 祐 元 年 (1034)	1	3	0	0	4
14 皇 宋 元 宝	宋 皇 宋 元 2 年 (1039)	2	17	8	3	30
15 至 和 元 宝	宋 至 和 元 年 (1054)	0	1	0	0	1
16 嘉 祐 通 宝	宋 嘉 祐 元 年 (1056)	0	3	1	0	4
17 治 平 元 宝	宋 治 平 元 年 (1064)	1	1	0	0	2
18 熙 寧 元 宝	宋 熙 寧 元 年 (1068)	1	13	4	0	18
19 元 豊 通 宝	宋 元 豊 元 年 (1078)	3	20	2	2	27
20 元 祐 通 宝	宋 元 祐 元 年 (1086)	2	12	1	1	16
21 紹 聖 元 宝	宋 紹 聖 元 年 (1094)	0	1	2	0	3
22 元 符 通 宝	宋 元 符 元 年 (1098)	1	3	0	0	4
23 聖 宋 元 宝	宋 建 中 靖 國 元 年 (1101)	0	3	2	2	7
24 大 觀 通 宝	宋 大 觀 元 年 (1107)	0	2	1	0	3
25 政 和 通 宝	宋 政 和 元 年 (1111)	3	6	3	0	12
26 宣 和 通 宝	宋 宣 和 元 年 (1119)	0	2	1	1	4
27 淳 熙 元 宝	南宋 淳 熙 元 年 (1174)	0	1	0	0	1

28	紹熙元宝	南宋紹熙元年(1190)	0	1	0	0	1
29	慶元通寶	南宋慶元元年(1195)	1	0	1	1	3
30	嘉泰通寶	南宋嘉泰元年(1201)	0	1	0	0	1
31	嘉定通寶	南宋嘉定元年(1208)	0	0	2	0	2
32	洪武通寶	明洪武元年(1368)	0	3	1	1	5
33	永樂通寶	明永樂6年(1408)	1	1	2	0	4
34	寬永通寶	江戸寬永年間 (1624~1644)	0	2	5	5	12
(合計)			21	135	43	21	220
判読不明			1	27	7	6	41
(総合計)			22	162	50	27	261

IV 総 括

1970年度発掘調査の対象とした地域は、芦田川の中洲62,000㎡にかかる潜流橋の下手、約100mの東側低水敷にある遺跡包蔵小中洲約3,000㎡であった。

この地域は、1969年度に実施した潜流橋の上手約150mで現在のゴルフ場西側の小中洲がすでに洗い流されていたため東側低水敷の中で孤立してしており流水の勢を直接受ける地域でありほっておけば流失の危険性がひじょうに大きい地域であった。

ここでは、1968年度において調査を実施し潜流橋下の東側高水敷部分が芦田川の流水によって荒され、砂層の堆積のみであったことから考えて、遺構の残存は少ないとおもわれる地域ではあったが、小中洲の西端付近ですでに瓦や陶磁器があらわれており室町期の遺構と考えられる地域や方形の木組み井戸が水面にあらわれており、さらには、小中洲の先端部では、暗かつ色粘土層とともに、陶磁器や土師質土器の破片が多数散乱していることから、遺構の存在も想定できる地域であった。

調査により小中洲に堆積している砂層をとりのぞいていくと青色粘土層があらわれ、粘土層の直上付近から陶磁器や土師質土器片があらわれてきたが粘土層そのものは流水により荒されたものか凹凸部が多く、数条の溝が北から南へ走っていた。また、出土遺物も鎌倉期に比定できるものや室町期に比定できるものなど時期的に差があることとともに土器そのものもかなり磨滅しているものが多いこながら、小中洲一帯は、流れによりかなり攪乱されている可能性が強かった。

このようになんかの凹凸がありはするが一時期の遺構面と考えられる暗かつ色粘土層の直上まで排土を行ない、いよいよ遺構相当面の清掃と遺構の検出にかかろうとした矢先、本県を襲った台風9号、10号により調査区は、完全に洗い流されたといつてよいほどの打撃をうけた。

小中洲調査区への土砂の流入堆積は著しく、その排土は困難をきわめるとともに、遺構面残存の可能性も少なかった。

このため、県教育委員会では、今後の調査の日程や方法を検討するため調査委員会議を開いて協議した結果、本中洲周辺にあり、流失の危険性の強い箇所から調査を行なうことと新たに発見された井戸の調査に重点をおくことに決定した。

このような状況のもとでの1970年度の調査では、南側小中洲部分の調査においては、成果をあげることは少なかったが、14基におよぶ井戸の調査により、草戸千軒町遺跡の井戸の構造や

機能について、新しい資料をうることができた。

ここでは、6回にわたる調査によりあきらかにされた、井戸の構造、機能についてまとめておくことにしたい。

井戸の調査は、第1次から第6次の調査までに35基におよんでいる。その内訳をみると1961年度（第1次）1962年度（第2次）では6基、1968年度（第4次）では4基、1969年度（第5次）では11基、1970年度（第6次）では14基の調査を行なったが、低水敷にあらわれながら未調査のまま流失してしまったものを含めると約70基の多きにのぼるものとおもわれる。

これらの井戸は、その構造から大別して木組み井戸と石積み井戸とに分類することができる。

このうち木組み井戸についてみれば、さらに (1)方形井戸 (2)円形井戸 (3)その他の構造の井戸とに区分できるものである。いずれも草戸千軒町遺跡の鎌倉期の遺構面と考えられる堆積砂層下の青色（暗かつ色）粘土層に径2～3m前後の円形の掘り方をつくり、粘土層下の砂層の中に井戸を構築したものである。

木組み井戸も、第4次までの調査では、すべて方形のものと円形のものとに限られており、また、木組み方形井戸と円形井戸とは井戸内から出土する遺物（主として陶磁器類）や井戸わくの腐蝕の進行度から方形井戸が円形井戸よりやや古い時期に構築されたものであるとする説もあった。

ところが、第5次の調査では、方形井戸とともに下部構造は方形であるが上部構造が八角形を呈する井戸や下部構造が9角形の多面体を呈する井戸および曲物を2～3段に積み重ねたような形をなす曲物井戸が発見され、さらに第6次の調査では、上部構造は方形でその中に円形の桶側をおき、下部構造は12面体の井筒としているものや桶側を1～2段に重ねて井筒としているものなどが発見され、各種の構造が存在することと構築の時期にも多少の差があることがあきらかにされた。

つぎにこれらの井戸の概要をのべ、構造や機能について考察してみよう。

(1) 方形井戸

この井戸の中には、約150cm以上、幅30cm、厚さ2cm前後の1枚板を縦板としてめぐらし内側に2～3段の横板をわたし固定したもの（D2区第5号）や同じ構造でも水を浄化するために底に曲物や桶側をすえたもの（O3区第1号井戸、O0区第1号井戸などこの種の井戸が一番多い）、また、短い板を2～3枚つないで縦板としたもの（C11区第1号井戸、D3区第1号井戸）や縦板の内側へさらに板を横にして積みあげ、横板や隅柱を全然使用しないもの（1969

年のD1区井戸)、さらに縦板の内側にもう一重の方形井筒をめぐらしたもの(1961年の東側井戸)などがある。

とくに1970年において調査したO0区第1号井戸は、1辺約1mの方形の井筒の底に曲物をうめ込み、その上にくりぬきの中筒をおき、中筒と縦板の間には径20cm大の隙をつめ込み、中筒と曲物を固定するとともに浄水の役目を果しているものもある。

また、1969年度のD1区井戸では、長さ170cm以上、幅30cm、厚さ3cm前後の縦板の内側に、幅30cm、厚さ2.5cm前後の横板を積みあげ、土・水の流入を防いでいるものもある。

このように方形井戸の中には、縦板のつぎ目に簡単な板をそえるだけの簡略化されたものや、縦筒や、底に曲物などをおくといった浄水のための工夫がほどこされているものがあることから考えて機能的に違いがあったものといえよう。

(2) 円形井戸

この形状の井戸についても ㊸木組み円形井戸 ㊹曲物井戸 ㊺桶側の井戸の3つに分類できる。

㊸ この形状の井戸は、まだ発掘調査を実施していないため詳細をあきらかにすることはできないが、未調査のまま、低水敷中にあらわれているためその概要を知ることができる。

井戸は、10枚前後の縦板で囲った円形プランのもので、縦板の長さは不明であるが、幅30cm前後、厚さ3cm前後のものを使用しているものである。

㊹ では、1969年の調査によりあきらかにされたものである。

第1号では、径38.5cm、高さ22cmの曲物を青色砂層の中にすえ、その上に、径56cm、高さ39.8cmの曲物をのせて井筒としている。

第2号では、径40cm～63cm、高さ30cm～34cmの曲物を4段積み重ねている。

しかし、この形状の井戸は現状からは曲物だけを使用して構築したものとおもわれるが、曲物の外側に方形ないしは円形の縦板が存在した可能性もじゅうぶん考えられるものである。

㊺ この種の井戸は、1970年の調査により発見されたものである。

D2区第4号井戸では、長さ72.6cm～73.7cm、幅3.3cm～5.3cm、厚さ2cm前後の板を上段で54枚並べて径85cmの円形の桶側とし、板と板とをくさびでとめている。桶側の外側には、竹をあんたタガで固定している。下段も同様な構造であり、径83cmの円形をなしているが、下段の桶側の上端を削り、上段の桶側にさし込む構造のものである。(他にC6区第1号井戸)

(3) その他の構造の井戸

この井戸のなかには、1969年調査のD2区第2号9角形井戸、D2区第3号8角形井戸、お

および1970年調査のA0区第1号井戸などがある。

D2区第2号9角形井戸は、長さ120cm以上、幅25cm、厚さ2cm前後の縦板9枚を使用して9角形のプランを呈す井筒としたもので横棧などは使用していないが、縦板下端部にほぞ穴を穿ちつないでいたものようである。

D2区第3号8角形井戸では、下部には1辺98cmの方形の井筒をつくり、その上には8角形の井桁をおき、方形の井筒で支える構造をなしている。また、A0区第1号井戸では、1辺95cmの方形井筒の中に径82cmの円形の桶側をおさめ、上部構造とし、それを下部構造である12面体の井筒で支える構造の井戸である。12面体の井筒に使用している板は、長さ140cm、幅40cm、厚さ3cm前後あり、板と板の上端部と下端部では、長さ5cm、幅3cm、厚さ1cmのくさびでもってつないでいる。井筒の内法は、100～110cmを測り、上部構造よりは大きいため、12面体の井筒の上に横板をのせ方形の上部構造を支えている。

(2)、(3)の構造の井戸については、井戸内部から出土する遺物はむろんのこと、井戸掘り方の中から出土する遺物は、鎌倉期から室町期にかけてのものが混在しているため、井戸構築の先後関係をあきらかにすることは困難であるが、ただ、D2区第2号9角形井戸の掘り方の基底部に、木組み方形井戸の横棧の一部がのこっており、方形井戸を取り壊したのち9角形井戸を構築していることから推定すれば方形井戸→多面形井戸という関係が考えられよう。また円形井戸については内部から出土する遺物のみでは構築の時期を決定する資料に乏しいが、井戸内部の堆積土や遺物、また、遺構面からの深さなどから推測すれば、方形井戸と同時期の鎌倉期のものとすることができよう。

つぎに石積み井戸についてみれば、第4、5次の調査により発見されたものである。

この井戸は、径2～3m、深さ1.5m前後の掘り方の中に径2m前後の円形プランの井戸を構築している。内法は、1m前後で径30～50cm大の割石を乱積みになっている。基底部には、曲物などの浄化装置はなく、直ちに湧水層である青色砂層となっている。

構築の時期は、井戸掘り方の中から出土した陶磁器からみて室町期に下るものとおもわれ、井戸の性格も石積みの間隙から土砂や汚水の流入が著しく飲料水としては適さないことから業用水用の井戸と考えられるものである。

以上のことから考えて、3つの形態の井戸の間には方形井戸（円形井戸）→多面形井戸（複雑な構造）→石積み井戸という時期的関係が考えられよう。

また、これらの井戸の分布状態をみれば、第1次～第4次までの調査では発見された井戸の基数が少ないことから4～5軒の家が使用する共同井戸的なものと考えられたが、第5、6次の調査区では、井戸と井戸との間隔が2～3mのものがあり各家々に井戸があった可能性も推定されるようになった。

また、今までのところ井戸は第5次の調査区付近また本中瀬西側の護岸沿いに集中していることからこの付近に水脈がとおっていたものと推定できる。

以上みてきたように井戸の構造や分布状態からその機能を考えてみるに、井戸の構造から木組み井戸は飲料水用、石積み井戸は作業用水用の井戸と大別することができるようである。

また、木組み井戸の中でも、1969年の井戸や1970年〇〇区第1号井戸のように浄水のためかなり手の込んだ工夫がなされているものと縦板をめぐらし外側にそえ板をあてるだけで曲物などをうめこんでいないものがあることは、飲料水用の井戸であっても水質の良否があるためこのような構造上の差が生じたものと考えることができよう。 (河瀬 正利)

付 発掘調査日誌抄

7月20日(月)曇のち晴

午後2時すぎより顕入式を行なった。出席者は、県教育委員会福山教育事務所長、福山市長、福山市教育委員会教育長、松崎調査団長、その他報道関係者も同じ人数10名に達した。その後、宿舎において、これからの調査日程、方針について協議した。

7月21日(火)晴

梅雨あけで、芦田川が増水し、低水敷中の調査予定中洲に渡れないので、干潮を見はからって、杭と頭割による架橋作業をおこなった。

7月22日(水)晴

今年度の調査中洲は、5つのブロックからなるが、最南端中洲は従来遺跡の南限付近にあたるといわれており、その確認と、遺構担当面までの土砂の深さをあきらかにするため、1辺2mから10mの方形トレンチを中洲上に計7か所設け、A～Gと呼称する。



No.1 調査区の排土

7月23日(木)晴

昨年打込んだ調査グリッド標示杭が流失していたため、あらたに潜流橋東端のベンチマークより、50m間隔の杭を打込んだ。その結果、本年度調査地域は、C9区～C11区、D8区～D11区までであることが確認された。

7月24日(金)晴

D8区、D9区中洲の平板測量をおこない、外周の形状を測定した。同時に中洲西側に露出しているC11区第1号井戸の計測を行なった。

7月25日(土)晴

C11区第1号井戸を調査するため、露出している外板の周辺の清掃をおこない、写真撮影を行ない調査にかかった。午後、道具類の産廃作業中、井戸の外板が何者かによって抜き去られた。現場に残っていた数枚の板を見ると30～40cmと意外に短かく、井戸はほとんど残っていないのかもしれない。いずれにせよ、井戸の調査は後まわしにすることにした。

7月23日(日)晴

D10区、C10区中洲の平板測量を行なった。

7月27日(月)晴

昨日に続いて調査区の平板測量を行い、ほぼ、平面図を完成した。

7月23日(火)晴

堆積した流砂の量が膨大で、排土作業がおもわしくない。建設省福山工事事務所に再度、ブルドーザによる排土と流水の遮断を依頼した。

A・B・C・Dトレンチは遺構相当面に達した。土砂の堆積は1.1mから1.8mに達し、砂層と青灰色粘土層が細かく交互に堆積しており、生活層として把握できない、この下にある遺構相当面は、レベルからいって鎌倉期に比定される。

7月23日(水)晴

A・B・C・Dトレンチのセクションをとるため、壁面の清掃をおこない、写真撮影をおえた。

7月30日(木)晴

A・Bトレンチ東壁および南壁セクションを実測した。

7月31日(金)晴

Cトレンチ東壁および南壁セクションを実測した。

8月1日(土)晴

A・B・C・Dトレンチ遺構相当面からは、土器片が散見されるが、遺構検出はブルドーザによる流水堰止めと周辺の土砂排除後におこなうこととし、E・F・Gトレンチの排土作業に重点をおく。

建設省福山工事事務所と、ブルドーザによる流水堰止の方法及び位置について現地で協議した。

8月3日(月)晴

E・Fトレンチは、遺構相当面までの排土作業を終えた。セクションの写真撮影をおこなった。



No. 2 外板の一部を抜き去られたC11区第1号井戸



No. 3 Aトレンチセクション実測

8月4日（火）晴

Gトレンチの砂層の排土作業を終了した。E・Fトレンチはセクションの実測をおこなった。

午後よりブルドーザーによる堆積砂層の排土をはじめる。

8月5日（水）晴

ブルドーザーによる排土作業と流水の堰止めを続ける。本年度の調査区は小中洲が本流の中に分散しており、昨年、1昨年のように、周辺の低水敷を完全に干



No.4 ブルドーザーによる流れの堰止め

上げることはむつかしいようで、4か所をじゅづつなぎにせき止めて、東岸の高水敷と結び、半円形の堤防が本流に突き出すような形になる。

8月6日（木）晴

ブルドーザーによる流水遮断と表土剥離を終了した。表土は遺構相当面より約30～50cmを残して排除した。

8月7日（金）晴のち曇

本日より全遺構相当面の露出を開始することにし、まずD8区の排土作業からおこなう。

8月8日（土）雨のち曇

D8区の排土を続ける。遺物包含層の直上では、土師質土器のナベや、筒前銃口縁部などが散見された。

8月10日（月）曇のち晴

午後より、C9区・C10区の排土作業に移った。

8月11日（火）晴

C9区・C10区の排土作業を続行した。

8月12日（水）晴

C9区の最北端付近では、雨にむかう落込みがあるようである。包含層上面には流水に洗われた条痕が残っている。

8月14日（金）曇時々雨

本日をもってC9・C10区の包含層露出作業を終えた。D9・D10区付近はすでにブルドーザーによって、ほとんど土砂の除去が完了しているので、明日から、遺構検出に移る。

8月15日（土）雨のち曇

昨夜の台風通過により、芦田川の水量が急増し、調査区の周囲に築いた堤防が決壊したため、調査区は濁流に洗われていた。

はげしい風雨が断続的に続いた。

8月16日（日）晴ときどき曇

洪水で荒された現場のあとかたづけを終日おこなった。調査区内はなお水量が多く中に入れない。

8月17日（月）晴

昨日に引き続き、現場の整理をおこなった。

8月18日（火）晴

調査区の周囲にめぐらした堤防の決壊箇所を補修した。

8月19日（水）晴ときどき曇

調査区内にたまった濁水の排水と流入土の除去をおこなうが、作業は困難をきわめた。

8月20日（木）曇ときどき雨

調査区北端のD8区から遺構検出をはじめた。今回の出水で、奔流の直撃をうけ、相当けずられているが、遺物はかなり残っているようである。古銭4枚発見。

8月21日（金）雨

夜半より台風が接近し風雨が激しいため発掘を中止し、屋内作業をおこなった。

8月22日（土）曇のち晴

今回の10号台風は前回の9号台風より強烈であり、中洲にかかるコンクリート橋（潜流橋）や高水敷の中にある仮設物が流された。

調査区は全く水没し、どのようになっただかわからない。道具類の整理をおこなった。

8月23日（日）晴ときどき曇

現場の整理作業をおこなった。

8月24日（月）晴

調査区に入ってみると、堤防は全壊し、遺構面は大巾に削られ青色粘土層が露出していた。残っているのは、C11区の井戸の周辺のみで、とりあえずこのあたりの調査を始めた。

一方、今後の対策を協議するために調査員全員の参集を求めるべく連絡をした。



No. 5 台風第10号による芦田川の氾濫

8月25日(水)晴

現場で団長以下全員が集合して今後の対策を協議した。この結果、流失をまぬがれた遺構があればこの検出を急ぐ、同時に新たな出水によって流失する恐れのある低水敷中の井戸や、それに接する遺構などを重点的に調査することを決定し、文化庁に連絡し了解を得た。

8月27日(木)晴

昨日の決定にもとづき、大中洲最北端西側の低水敷中に孤立する小中洲(東西

5 m、南北20 m)中央部にトレンチを設定し、作業を開始した。

平板測量の結果、ベンチマークより200 m西側のAグリッド南北線が、小中洲中央部を通過するので、その西側の地域を新しくO区と呼称することにした。

8月23日(金)晴

小中洲の東側と南側に隣接してある井戸はグリッドの名称をとって、それぞれA0区第1号井戸、O0区第1号井戸と呼ぶことにした。

本日は、A0区第1号井戸の写真撮影を終え、プランの実測を開始した。この井戸は木組み方形井戸で、方形井筒の内側にオケ状の中筒が見える。

8月23日(土)晴

A0区第1号井戸のプラン実測を終えた。

8月31日(月)晴

小中洲は、砂がかなり堆積しており、その下に褐色土がある。遺構らしきものは現在のところあきらかでない。A0区第1号井戸のレベルからすると、もうすこし掘り下げて検討する必要がある。干潮時をみはからって、1号井戸内を調査した。

9月1日(火)晴

A0区小中洲の南北断面を実測した。昨日の褐色土を調査したが遺物包含層ではなく、その下は青色粘土層で、さらに掘り下げると砂層へと続いていた。結局この小中洲は遺構の存しない再堆積の中洲であると判断し作業を打切った。

9月2日(水)晴

A0区第1号井戸は、横桟が出てきたので、平面図に入れ、断面図も横桟のレベルまで記入した。



No. 6 台風第10号による調査区流失

本日より、洪水で流失した初めての調査区で、残存遺構の有無を確認する作業に入った。

9月3日(木) 晴

A0区第1号井戸の中筒は、30cmぐらいしか残っておらず、板材はそれぞれホゾ穴をあけて竹のクサビで連結していた。写真撮影ののちこれに番号を記入して取りあげた。

D2区第4号井戸の発掘を開始した。もともと円形であったようだが、土圧によって楕円形になっていた。約1mを掘り下げると青磁片や備前焼の甕の破片、土師製の小皿などが出土した。

9月4日(金) 晴

A0区第1号井戸——横棧が2段あり、下段の横棧のところを外板は終り、さらに下部には、12面体の井筒があった。この井筒は上段の方形井筒よりも大きく、二者の間には、不整形の板がはさまっている。この板で上段の井筒を支えたようである。

C1区第4号井戸——最初は円形井戸とおもわれたが下端は方形をなすことが判明した。A0区第1号井戸のような構造らしい。内部からは、土師製土器、備前焼、鉄製品などが出土した。

9月5日(土) 晴

A0区第1号井戸——下段の12面体井筒は、1枚1面で、上端から下端まで140cmを測る。内部からは、陶磁器類、古銭(皇宋通宝)1枚、木片多数が出土した。

D2区第5号井戸——方形木組み井戸で掘り方がよく残っている。竜泉窯青磁が多数出土した。

9月6日(日) 晴

O0区第1号井戸——方形の井筒内部に円形の工作物がはめこまれており、円



No.7 A0区第1号井戸の調査



No.8 D2区第5号井戸の調査

形工作物と方形井筒の間には礎がびっしりと入っている。

9月7日(月)晴

平板測量をおこない、D2区第4号、5号井戸、C1区第4号井戸の位置をいれた。(1/200)

D2区第4号井戸——井戸の外側を掘り込んだところ竹で編んだ「タガ」がはめられていることがあきらかになった。

D2区第5号井戸——上、下2枚の横桟があり、約1mで下端に達した。写真撮影を終えとり上げた。

C1区第6号井戸——流水中にある方形井戸であるが、内部に曲物があるようである。

9月8日(火)晴

D2区第4号井戸——引き上げ作業をおこなった。井筒は上、下二段からなり、上段54枚、下段60枚の板材から構成されていることがわかった。

C1区第6号井戸——内部は深さ60m前後になると青色粘土質砂層にかわり、多量の礎を含むが、遺物はほとんど出土しなかった。土鍾と古銭(寛永通宝)が出土した。

C1区第5号井戸——流水中で方形井戸を発見した。側板の欠損した部分もあるが、横桟がのこっている。本日は内部の排土を終り位置を平板にとった。内部からは土師質小皿、備前焼すり鉢、亀山焼、白磁片などが出土した。

C1区第4号井戸——路測、レベルをはかったのち、ただちにとりあげた。保存は比較的上かった。

9月9日(水)晴

O0区第1号井戸——中筒は一木をくり抜いたものであることがわかった。このくりものには、たて長の孔のある把手がついている。午後から中筒を引き上げた。遺物は古銭(祥符通宝)、陶磁器片などであまり多くない。

9月11日(金)晴

O0区第1号井戸——昨日上げ現してあったわくの棧とくり抜きの下に接していた曲物を引き上げた。

9月12日(土)晴

O0区第1号井戸の南の低水敷中に4基の井戸を確認して、平板測量をおこなった(scale 1/200)。すべて木組み方形井戸である。

9月14日(月)晴

O2区第1号井戸——四隅に門柱を打



No.9 O0区第1号井戸の引き上げ

込み、それぞれの柱にホゾ穴を穿ち横棧をわたしている。砂と青色粘土がほとんどで河原石なども入っている。これは昭和39年調査の井戸と同じ構造である。

○1区第1号井戸——水中に没しており、横棧は1本しか残っていない。外板は剥落して約60cmぐらいしか残っていなかった。

9月15日(火)晴ときどき曇

○3区第1号井戸——昨日の○2区第1号井戸と同様の構造だが、底に桶状の浄化装置が設けられていた。他の井戸における曲物と同様の役割を果たすようだ。湧水が激しい。内部からは陶磁器のうち、とりわけ常滑焼の口縁部の出土が目立った。

9月16日(水)曇のち晴

D4区第1号井戸——大潮のため、水中での発掘となった。上端より50cmぐらいの排土作業をおこなった。有機質の黒褐色土で、かなり礫が混入していた。遺物は陶磁器、土師質土器等を中心にして、量は多い。

洪水により流失した調査区では、遺物は散見されるが、遺構は発見されない。なお調査を続行中。

9月18日(金)雨

雨天のため、遺物の整理をおこなった。

9月20日(日)曇

○2区第1号井戸——1mほど掘り下げたあと、横棧のレベルを入れた。

○3区第1号井戸——西側横棧のレベルを入れた。

9月21日(月)晴

○2区第1号井戸——井戸わくの引き上げをおこなった。四方からの土圧によって、井筒は内側に傾斜しており、北側は、ほとんど崩壊していた。南西側の柱は八角形に面どりされており、他の柱は下端を削って尖らせていた。

9月22日(火)雨

○4区第1号井戸——上端から約1mぐらいまで掘り進んだ。相変らず礫が多い。スラグ塊、フィゴの火口が、かなり多く、その他漆器底部、鹿角、石うすの断片などが出土した。

9月24日(木)曇

○3区第1号井戸——先日の大雨のため、土砂が流入し、ほとんどうまってしまったので、終日排土作業をおこなった。

9月25日(金)曇

○3区第1号井戸——写真撮影、実測をおこない、引き上げた。

9月23日(土)晴

C6区第1号井戸——周辺の平板掘削を実施し発掘を開始した。D2区第4号井戸と同一の構造だが、流水によって井筒の外側の土砂が削られたため、下段が残っているだけだった。角礫や円礫が、かなり混じり発掘は思うにまかせない。

9月27日(日)

C6区第1号井戸——外板のとり上げを行なった。総数53枚で幅約5cm、長さ約80cmをはかり、上部の幅がややせまく、この部分は外側がけづりこまれていた。内部からは、陶磁器片(前前徳、竜泉廣背徳)、木製の鉄と柄の一部、目釘のある刀子の断片などが出土した。

9月28日(月)曇

O4区第1号井戸——内部の排土をつづける。青色砂屑に遺しているが、直上には、植物質のものが多く、加工痕のある板、木材、ファイゴの火口などが出土した。

9月29日(火)晴のち曇

O4区第1号井戸——1.1m余りのところに2段目の横棧があり、この下あたりからは泥質粘土に木くずの混入したヘドロ状になってきた。梳櫛の断片、イノシシの頸骨、ドンブリ、マツカサ、栗の実などが出土した。

9月30日(水)雨のち曇

O4区第1号井戸——干瀬が大きくなったのでポンプを使用し、一気に底部まで掘り進んだ。三段目の横棧は、東側が5cmあがっていた。外板下端と同一のレベルに曲物が置かれ、内外には、礫が密に入っていた。遺物は、瀬戸焼の黒天目軸の断片をはじめとする陶磁器、人形、トイグシなどの木製品があった。人形は昨年発見のものより小形で荒けずりだが、烏帽子はするどくて長い。

10月1日(木)晴

O4区第1号井戸——ポンプで排水をしながら清掃し、写真撮影をおこなった。

10月2日(金)晴

O4区第1号井戸——干瀬を行ない、曲物を引き上げた。直径約50cm、高さ約25cm、厚さ0.2~0.3cmで外側のタガははずれてしまった。

10月3日(土)晴

C11区第1号井戸——木組み方形井戸であるが本流に接していて、発掘が困難なので、周囲に杭を打込み土砂を積上げて土手を作り、排水をおこなった。

10月4日(日)曇のち雨

C11区第1号井戸——発掘をはじめた。すぐに横棧に達したが、これは当初予想した下端ではなく、この下にもう1枚の横棧が接しており、この下側の横棧で上部の外板と横棧を支えていた。つまり、井筒の

中に、別の井筒をはめこんで中継ぎした形になっており、下部構造がかなり残っているようである。

10月5日(月)曇ときどき雨

C11区第1号井戸——昨日の雨による増水のため、井戸のまわりに築いた土手が崩壊してしまったので、改めて堤防を築いた。

10月6日(火)晴

C11区第1号井戸——上端より90cmのところ以下段の横椽が発見された。内部は有機粘質土が充填しており、悪臭をはなつ。土師質の小皿や木片が多く出土した。

10月7日(水)晴

C11区第1号井戸——下段の横椽から20cmで井筒外板が終り、湧水砂層となる。虫物は存在しなかった。湧水の噴出が激しいので、略掘のみで井筒を引き上げた。最下段の横椽は土圧で外板が倒れ、土砂の流入が激しく危険となったので、やむなく取上げを断念した。

10月8日(木)晴

O4区第1号井戸——引き上げ作業をおこなった。最下段の横椽はがはずれず困難をきわめた。本井戸はA0区第1号井戸の下部12面体井筒とともに、もっともしっかりしていた。

10月13日(火)晴

C0区9、Vグリッド付近に低水敷に平行してトレンチを設定し、発掘を始めた。この付近は、低水敷に接する部分の侵蝕が著しく、遺物包含層がえぐられ露出している。

10月14日(水)晴

C0区トレンチの掘土作業を行なった。主な堆積物は砂であるが、細粒砂や粗粒砂が不整合に堆積しその間に青色粘土や褐色土も入っている。

10月15日(木)晴

C0区、C1区の平板測量をおこない外周の形状を測定した。(scale 1/200)

10月17日(土)晴

遺構相当面までの土砂排除を行なった。堆積土の大部分は砂層である。

10月18日(日)晴

トレンチの北側は遺物包含層である暗褐色土層がうすく、すぐに赤成粘土層になる。

遺構検出作業中Vグリッドで、幅2mの青色粘土層が東西に延びているのが発見された。溝のようだ。

10月19日(月)晴

昨日発見の青色粘土帯を発掘、深さが約20cmの浅い落ち込みであることがわかった。電泉窯青磁片、土師質小皿などが出土した。

10月20日(火)晴

C2区からC4区を平板測量した。(scale 1/200)

10月21日（水）晴

ベンチマークよりC0区ポイント杭までの距離を測定した。

昨年打込んだ50mグリッド標示杭のうち、流されているものがあるので、これを打ちなおした。

10月22日（木）晴

C0区Pグリッドトレンチ北壁および、Vグリッド西壁セクションを実測し、写真撮影もあわせておこなった。

D3区—a・f・k・Pグリッド付近の流水による侵蝕がとくにはげしく遺物包含層が露出し杭列などが出ているので、a・f・k・Pグリッドを含むトレンチを設定し、発掘作業を開始した。

午後2時すぎ、県会文教委員11名による視察があった。



No.10 D3区流水中に並ぶ杭列

10月23日（金）晴

fグリッドの杭列東側で、流水に洗われる地点に凹地があるので平面を削平したところ、井戸の掘り方を発見した。

C0区Vグリッド——溝を実測した。この溝は流水中にあったC1区9号井戸の方向にむかっており近接しているが何等かの関係があったかどうかは不明である。

10月24日（土）晴

D3区第1号井戸——発掘をはじめた。他の井戸よりも小型である。

10月25日（日）晴

D3区第1号井戸——上端から約80cmで3段目の横桟に達した。このあたりから湧水がはげしくなり調査を中止した。この井戸は小型だが、構造は比較的しっかりしている。外板の幅は大きく東側を除いて三方が3枚からなる。内部は上端から下端まで有機物の腐蝕した黒褐色粘質土で覆は少なかった。遺物は、木の突



No.11 D3区杭列に隣接してあらわれた第1号井戸

(ドンブリなど)、土師質土器小皿完形品、亀山焼断片、土ナベ片、墨線のある細板、板碑2基、木片などが出土した。このうち板碑の一つは頂部に五輪を形どり梵字と南無阿弥陀仏の字がかすかに読める。

平板に枕列および井戸の位置を入れた。

10月26日（月）晴

D3区トレンチ——西側では包含層がかなり高い。炭化物や土師質土器片などがかなり出土したが、柱穴などは現在のところみつからない。

10月27日（火）晴

枕列の検出を中心に、調査をすすめた。枕列にともなう掘り方らしいものは、ほとんどないといってよい。

10月28日（水）晴

トレンチ内の枕を掘出した。枕と枕の間隔はかなりせまい。この枕列はさらに南の方に続くようである。

10月29日（木）晴ときどき曇

枕列の実測および写真撮影を行なった。

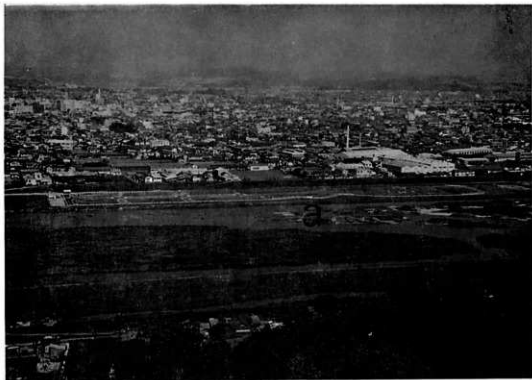
10月30日（金）晴

枕列のうめもどしをおこない、道具類、出土遺物を整理して、本年度の発掘作業を終了した。

（金井 竜岩）



版



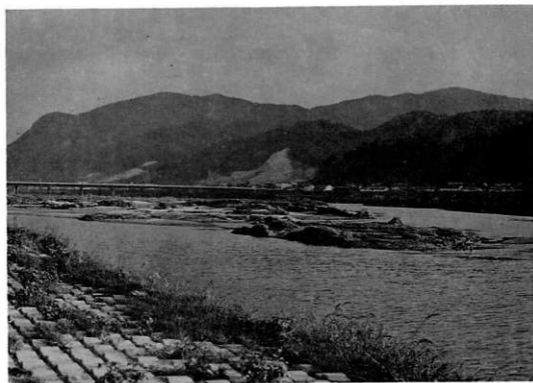
a 草戸千軒町道跡遠景 (aが調査区)



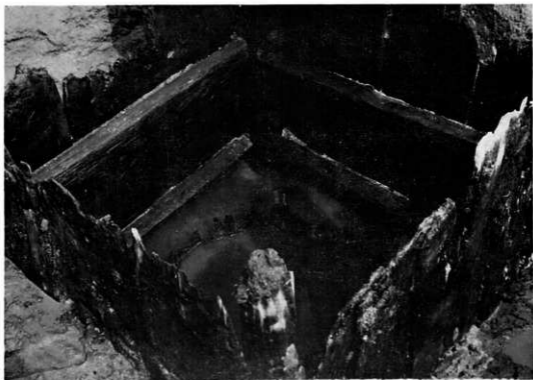
b 調査区近景



a 調査区断面



b 流失した調査区



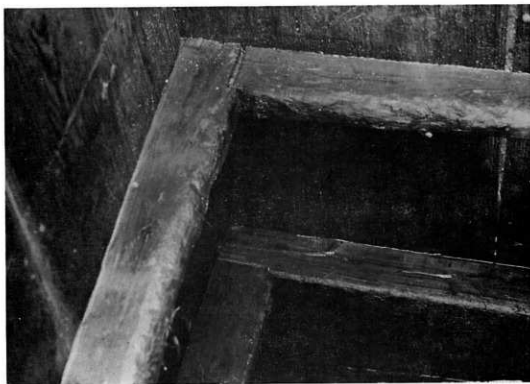
a O3区第1号井戸全景



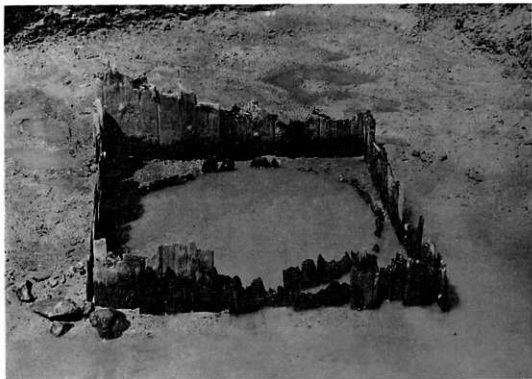
b 隔柱と横棧の状態



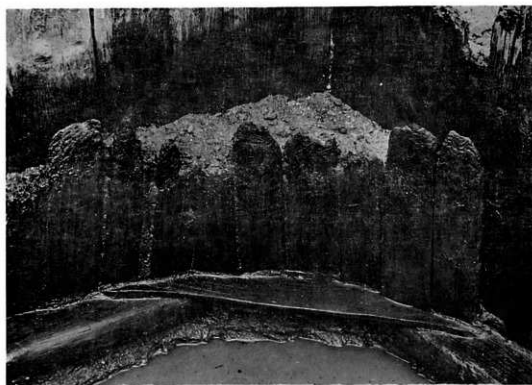
a ○4区第1号井戸全景



b 横棧の組方



a A0区第1号井戸調査前の状態



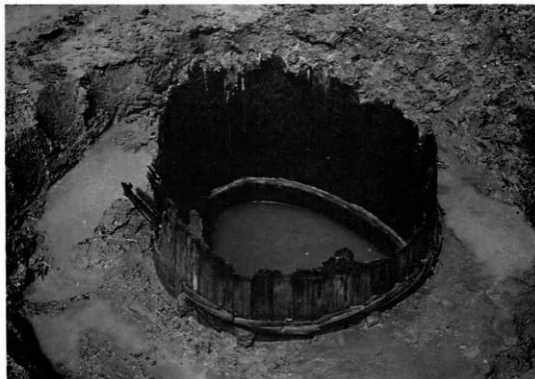
b 上部構造内部の状態



a A0区第1号井戸上部構造内部の状態（円形工作物をのぞいた状態）



b 下部構造上端の状態



a D2区第4号井戸全景



b たがのしめ方の状態



a D3区発掘前の状態



b 杭列全景



a 杭列とD3区第1号井戸との関係



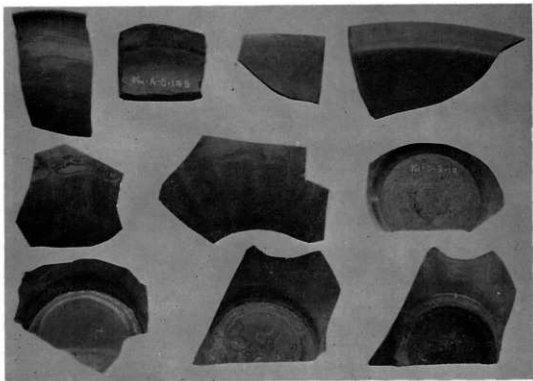
b 杭列部分



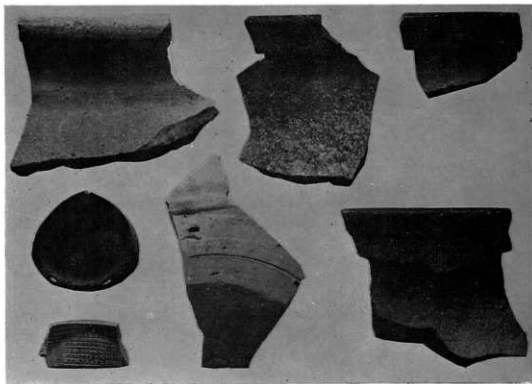
a □3区第1号井戸上部の状態



b 井戸全景



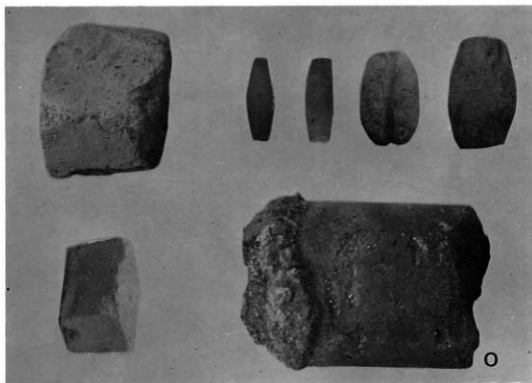
a 中国製陶磁器類



b 日本製陶磁器類



■ 土師質土器



b 石製品・土製品 (O印はフィゴの羽口)



a ○0区第1号井戸くり抜き中筒



b 木製 鎌

昭和46年3月25日 印刷

昭和46年3月31日 発行

草戸千軒町遺跡 1970年度
発掘調査概報

編集 広島県教育委員会
発行 朝日精版印刷株式会社
印刷